

## 「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行

### 第6回フォーラム検討会議

#### 逐語録

(木村) それでは第6回のフォーラム検討会議を始めます。

最初に資料の確認です。一番上が議事次第(F6-0)になります。次が議事録(案)(F6-1)です。F6-2-1とF6-2-2が逐語録です。前回は午前、午後とやりましたので、2つあるということですね。次が付録(F6-3)です。この前の表と、裏にはその英語の部分が書いてあるというものです。次が、F6-4「フォーラム検討会議の成果をどうまとめるか」ですけれども、前回の最後に私がまとめたものですね。F6-5が「フォーラム・マニュアル」と書いてあるものです。全体の構成を整理したので、それが書いてある1枚の紙です。次に、竹中君が配っていた「コミュニケーション・マニュアル」という資料、F6-6です。次に「放射線学び合いBOOK」がF6-7です。次に、フォーラムに関する議論の整理がF6-8。フォーラムへのご協力のお願いがF6-9です。F6-8とF6-9は前回の会議でもお配りしているものです。ということでF6-9までありますけれども、大丈夫でしょうか。

それでは、早速今日の議事に入っていきたいと思います。今日の議事ですけれども、最初に議事録の確認をします。次に、フォーラム・マニュアルの3部作を作っていくところの検討に入っていきますけれども、最初に前回の議論を受けて「コミュニケーション・マニュアル」を竹中君に検討していただきましたので、そちらの確認と、その検討をやっていきたいと思います。これが前半です。

後半は、「フォーラム計画書」の検討と書いてありますけれども、元気ネットさんから「放射線学び合いBOOK」を参考として見せていただいていますので、こちらを紹介いただいて、これを参考にしながら、フォーラムの計画書を具体的に作る、プログラムを具体的に作るということになると思います。

最後に、今日の話題になるかどうか分かりませんが、「ファシリテーターのためのマニュアル」ということで、そちらの検討も始められたら始めたいということになります。

#### 0. 議事録確認

(木村) まずの議事録の確認をやっていきたいと思いますが、議事録、逐語録は皆さんにもうお配りをしていると思いますので、逐語録を読むことはしません。

ということで、前回何をやったかを思い出してもらおうと思います。前回は竹中君に資料を説明してもらったというのが大きな話でした。F6-4を見てもらったほうがいいのかもし

れません。これは最後にまとめた内容ですので、こちらを読んでもらったほうがいいかなと思います。議事録にも、4ページに「まとめ」というところがありますけれども、これと同じようなことが F6-4 にも書いてありますので、こちらを読んで、議事録の確認に代えさせてもらえればと思います。

フォーラム検討会議の成果をどうまとめていくかということで、1つ目は「コミュニケーション・マニュアル」を作成しようということです。前回の竹中君の文献紹介の、Habermas の情報提供の分類とか、Renn のコミュニケーション・フィールドの評価リストというものをちゃんとした日本語に直して、「コミュニケーション・マニュアル」とする。参加者の話し合いのための「技能」として共有できるものというものを作っていこうということを確認しました。

その際に、評価リストだけでなく、理解促進のために具体的事例を添付したらどうだろうかということです。あとは確認事項が2つほどあって、フェアネス（公正性）、コンピテンス（能力・専門性）というものが評価リストの中で選ばれていたわけですが、それはどういう理由ですかというのが Q として出ています。もう1つは、Habermas の議論も整理する必要があるそうだということ。そして、Habermas の何を改善するものとして Renn は提案しているのか。この2つの Q について、少し後で確認をしておきましょうということがありました。

ただ、コミュニケーション・マニュアルを作成するにあたっては、この文献はコンフリクトのある社会問題の解決を目指したフィールドの構築というものであったので、今回のフォーラムとは目的が異なるということで、その辺りを注意して調整をする必要があるだろうということが確認をされております。

順番が逆転していますけれども、「フォーラム・マニュアル」に含まれるものということで、その中にコミュニケーション・マニュアルがある。2つ目が「フォーラムの計画書」です。最後に「ファシリテーターのためのマニュアル」。こういう3点セットでフォーラム・マニュアルというものを作っていきましょうということです。

あとは検討事項として、フォーラムの位置づけ、参加者を募る方法について、バックアップを用意しておいてほしいという話がありましたので、そちらは少し検討しておく必要があるかもしれない。

あとは、前回の竹中君の紹介の中で、公募制とかオランダモデルとか、いろいろな手法がどういう性質のものなのかという話をしたと思いますけれども、そういう中で「フォーラム」は、どのようなことを扱う取り組みなので、どんな要点を大切にしていかなければいけないのか、ということを少し整理する必要がありますよねということを確認しました。

その他としては、フォーラムの新規性の議論を固めておくということ。

これで前回の議論が閉じたということになります。ここに関しては、議事録と齟齬はないですね。

(竹中) 確認しておきます。

(木村) 前回までの話し合いがどう進んだかを思い出していただければと思います。よろしいでしょうか。

そういえば、川島さんから一言いただくのを忘れていました。今日は視察に見えたということでしょうか。一言いただければと思います。

(川島) 川島と申します。よろしくお願ひいたします。PONPOには、一昨年くらいからときどき顔を出していました。大変面白そうなことをやっているなということで、関心はあるのですが、私はこういう活動をあまりやったことがないので、元々が設計屋でございますので。

今日は隅に座って皆さんの話を伺おうと思っていたのですが、こんなところに座らされましたけど、とにかく一生懸命聞かせていただいて、何かお役に立てることがあればやらせていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

(神崎) 川島さんはPONPOの理事で、経理部長です。元々もんじゅの設計に携わっておられたということですか。

(木村) 来年からはこちらのNPOのほうを文科省の受託先にしようという話で今動いていまして、そこでご協力いただいているということで、実際にどういう活動かというのをご興味を持っていただけたので、今日は参加していただいたと、そういう経緯です。よろしくお願ひいたします。

## 1. 「コミュニケーション・マニュアル」の確認と検討

(木村) それでは、今日の本題に入っていきたいと思います。まずはF6-5を見ていただきたいと思います。前回の議論を受けて、フォーラム・マニュアルをこの検討会議で作っていきましょうというときに、そのマニュアルに含まれるものを少し整理をしました。

フォーラム・マニュアルに含まれるものは、まずは「フォーラムの計画書」ですね。フォーラムの目的、今まで検討してきたようなこと、それこそF6-8(「フォーラムに関する議論の整理」)の内容を前段におきながら、後半にはフォーラムのスケジュール、プログラムなどをまとめたものです。これを含めようということ。

2つ目は、今日の前半でお話があると思いますけれども、「コミュニケーション・マニュアル」です。参加者が円滑に話し合うために知っておくべき技能をまとめてあるもの。これは我々も当然持つておくのですけれども、参加者に配布するものとしてまとめようとい

うことです。

3つ目は、「ファシリテーターのためのマニュアル」、我々が持つておくマニュアルということです。フォーラムを取り仕切る研究者側、我々が、ファシリテーターが何に気をつけるかということをもとめておくものです。

この3点セットを用意すればいいのではないかとということです。

「フォーラムの計画書」は、今までに議論したフォーラムの目的等を前段に含み、後半はプログラムおよび進行管理表みたいなところまで書いておけるといいかなと思っています。

「コミュニケーション・マニュアル」は今日詳しい話がありますけれども、評価リストの部分はある程度私と竹中君で調整をしたのですけれども、分かりにくいところを直したりとか、関連するところに具体的な事例をはさめるところははさみたいなと思っていました、そういうところに関する情報を今日はいただければなと思っています。

最後、「ファシリテーターのためのマニュアル」は、どういうものになるかということも議論しないと、全貌が見えなかったの、ポツだけ入れて、自由に記述できるようにしております。ということで、フォーラムのマニュアルとして用意するものはこの3点セットということで準備をしていきたいと思っています。

ここに関してはいかがでしょうか。よろしいでしょうか。もしかすると、特に「ファシリテーターのためのマニュアル」の位置づけは、「コミュニケーション・マニュアル」に含めたほうがいいのか、いろいろなことが出てくるかもしれませんので、柔軟に考えて、その場その場で検討させていただければと思います。今のところはこういう構成でいきたいと考えているということです。

ということで、「コミュニケーション・マニュアル」の確認と検討に進みます。資料はF6-6です。これは前回のRennの文献を踏まえて、コミュニケーションのマニュアルとして、私と竹中君で、かなり大変な議論をしながら、日本語として成立するようにしたものです。

一応概要だけご説明しておきますと、最初に、話し合いをするときに意識するポイントということで、4つの場合について簡潔にまとめています。〔概念〕、〔論理〕、〔規則〕、〔感情〕と名前をつけましたけれども、「言葉の定義や概念を述べる」という部分。「客観的に観測される事実に基づいた事柄や、論理的に組み立てられた事柄について述べる」という部分。「他人とのつながりや、社会のルールについて述べる」という部分。「自分の中の意見や感情を述べる」という部分。この4つが「話す」というものを構成する部分なので、この4つについて、以下に意識するべき点を述べていくという構成になっています。

1-1が「話す」とき全般で意識すること。1-2が、〔概念〕の話で意識すること。1-3が〔論理〕の話で意識すること。1-4が〔規則〕の話で意識すること。1-5が〔感情〕の話で意識すること。このように整理をしています。評価リストとしてはここまでのかなと思っています。

次に2番、ファシリテーションルールと書いてありますけれども、こちらは **Renn** のお話の中で、場をどうやって回していくかとか、意思決定をしていくにはどうしたらいいかとか、場の設定はどのようにしたらいいかというような、そういうことに含まれそうなものをまとめています。要は、前段に含まれなかったものをとりあえず羅列してあって、これを今後どのようにまとめるかということ、前半の後半では議論させていただければと思っています。

ということで、進め方ですけども、個人個人で、時間を10分くらいとりますので、4ページまで読んでいただいて、意味が分からないとか、言葉が分かりにくいとか、こういう言葉のほうがいいのではないかということをチェックしてください。その後、1-1はどうでしょうかという形で聞いていきたいと思います。そんな方法でよろしいですか。では、しばらく時間をとりますから、その間に4ページまで読んでいただいて、その後意見交換をさせていただければと思います。

(資料に目を通す)

—— 各項目の冒頭についている四角なのですけども、一段へこんでいるところは小項目という意味ですか。

(木村) そういうことです。少し分かりにくいですね。分かりやすい記号等があるといいですね。

(資料に目を通す)

(木村) どうでしょうか。一通り目を通し終わったでしょうか。

それではまず全体に関して、ご意見、ご感想はありますか。

—— すごく読みやすくなりました。

(木村) よかった。

—— 前回の **Habermas** の話を聞いて、インターネットでも調べたのですが、**Habermas** の書いていることに対して、いろんな意見があるのです。解釈もいろいろ違っていて、**Renn** のも当然出てきましたし、ロンドン何とか大学の、ロンドン出身の方の解釈も、似ているのだけど、それぞれ違うのですよね。おそらく **Habermas** の本には哲学的なことが書いてあって、それをいろいろな方法で解釈しているのではないかと思います。

(木村) まさにその一派ですよ、これも。

—— この論理は国際共通なのです。いろいろなところでこれは使えるのですよね。私も何回も使わせてもらったのですよ。

竹中さんの資料を見て調べたら、1980年代後半とか、1990年代ぐらいからいろいろ出ていませんか。

(木村) この資料は1995年くらいのものですね。

—— Habermas は、結構昔から書いています。70年代くらいから。

—— 私は、最初にこの人の名前を見たのは、1981年の論文だったのですね。その頃から彼の哲学というのはやはり有名なのです。そういう意味では実践するには価値があるという感じがします。

(木村) 言っていることはとても真つ当なことなので。実はこういうことを昔から研究している人はいるのです。ただ、日本語ではなかなかお目にかからないから、結構これはいいかもしれない。

—— 1981年とおっしゃいましたが、なぜそんなに昔から知っておられたのですか。自分が何かお話ししようとするときに、こういうものがあつたほうがいいと思って手に取られたのですか。

—— 私は1981年、82年はアメリカにいたのです。そのときに、自分の考え方が伝わらないという話があつたのですよね。そのときにいろいろな勉強をやらされたのですよ、毎週金曜日に。ニューメキシコにいたのですが、ニューメキシコ大学から、ワンさんという方が来て、教えてくれるのです。こういうことをやるといいよとか。その中にこの話があつたのです。

そのときに、議長のやり方の話がありました。話の交通整理をすれば、自ずから結論が見えてくる。自分の意見を言わなくてもいいのだよと。そのときはファシリテーターという言葉を使わなかったのですが、そういうことを勉強させてもらって。

それで、これは言ってもたぶん理解できないと言われたのですが、そのときに言われたのが、老子の言葉が入っているのです。「聞いたことはすぐ忘れる。見たことは思い出す。行なつたことは忘れない」。やらないと分からないのだそうです。

—— では、知っていても駄目だということですね。

—— 昔その話があって、今回まさかと思ったら、Habermas だったのですね。だから彼は本当に欧米では、哲学的には有名な方だと思いますね。そのときはそんなに偉い人だとは思わなかったですけど。

そういう意味では、いいのを発表してもらって、よかったと思います。

—— PO の方々から、いい本を推薦されたということですね。

(木村) よかったです。

そうしたら、中身を 1 つずつ見ていきたいと思います。まず、表の部分で何か気になる部分はありますか。これはもう少し文章をならさなければいけないと思っています。導入の部分は考えなければいけないなどは思っているのですけれども。少なくとも、この表はこういう形で使いたいなと思っていますけど、ここに関してはいかがでしょうか。

私たちの中では、〔論理〕の説明が分かるのかどうか、疑問なところではあるのですけれども。

—— このあいだの竹中さんからいただいた資料の「求められる要素」が表から消されていますよね。リストの中に入ってるので消されたと思うのですけれども。

やはり表の中にあると、表を見る上で助けになると思うのですよ。これだけだと助けになるものがなくて。下を読んでいくとだんだん分かるのですけど、表に「分かりやすさ」、「正しさ」、「誠実さ」とかがあったほうが、助けになるかなと思います。

(木村) やはりあったほうがいいですね。

—— 〔概念〕で、「言葉の定義や概念を述べる」。分かるけど、じゃあ何なのというときに、1-2の「わかりやすい」言葉で話そう。これを組み合わせるとよく分かるのですよね。

—— そうですよ。だから下を読んでいくと分かるのですよ。この表を眺めるときに、その簡単な言葉があるといいかなと。

(木村) 元々は書いていたのですけど、表のレイアウトを考えて、抜いてしまったのですよ。でも、入れたほうがいいかなとも思いつつだったので、入れることにしましょうか。

—— そのほうが分かりやすいのではないかと思いますね。

(木村) では、入れるように調整しましょう。

他はどうでしょうか。「求められる要素」が表の中にあれば、小難しい言い回しだけど、分かりますか。

それでは次です。1-1、2項目しかありませんけど、「話す」とき全般で意識することに関して、何でも構いませんので、意見やコメントをいただければと思います。

項目の頭に白抜きの四角にしているのはチェック項目みたいなつもりで入れています。よろしいですか。ここはまだそんなに難しくないとこなので。では、1-2に行ってよろしいでしょうか。

もし具体的な事例があれば、言っていただければその場で書き留めていきますので、よろしくお願いします。

では1-2の〔概念〕の話です。こちらについてはいかがでしょうか。

これは見せ方の問題だけど、私は「わかりやすい」というのが一番大切なポイントなので、ここは太字にしておくとか、目立つようにしたほうがいいと思いました。

ここは、私たちもそんなに迷うことなく進めたところですよ。では、ここはよろしいでしょうか。では、1-3についてはいかがでしょうか。

—— 書いてあることは分かるのですけれども、どうやって区別したらいいのかなというのが分からなくて質問するのですけれども。

「話の中で使われている事実が、専門家の中で認められている学術的な知見である場合」と、「話の中で使われる事実が、専門家の間で見解が割れているような場合」というところで、すごく良いことが書いてありますよね。

これは、専門家の方に、私たちが「それは学術的な知見ですか」とか、「それは意見が分かれていますか」という聞き方をすれば、お答えしていただけるようなものなのではないでしょうか。

(木村) 専門家に通じるかな？ 私は、これを書いたから通じちゃうけど(笑)。

—— どうなのですか。もし通じるなら、この文章がすごく使えるなと思ったのですけど。

—— 私も同じところで疑問に思ったのが、「話の中で使われる事実が、専門家の間で見解が割れているような場合」のほうなのですから、例えば9:1で割れていたら、それは知見といえるのか。

それから、9:1の1のほうの専門家の話を聞いたときに、「これってどうなのですか」「いや、それは見解が割れているんですよ」と言われると、半々くらいに割れているのかな、とってしまうかもしれない。そういう場合もあるのではないかと、どうなのかな、と思ったのです。

—— そうなのです。その割合みたいなものも話してくださるのか。両極端の方は、9:1の1でも、「事実です」みたいにおっしゃるので。そういうことを明らかにしてくださる聞き方かしらと思ったのです。

(木村) それは専門家は言わないですね。でも文献の中に、そういう場合にどうしろというのを書いていないですね。

—— 書いていないですね。

(木村) どうしますか。何かプラスアルファで入れましょうか。そういうケースはよくありますよね。

—— 素人だと、9:1の1のほうの人に、「これは見解が割れているのですよ、今論争中なのですよ」と言われれば、「半分ずつくらいなのかな」という印象で受け取りやすいと思うのですよね。

—— 専門家は、9:1とは言わないでしょう。たとえ1でも、「割れている」としか言わない。

—— そう、割れているとしか言わないから。

—— 私もそこが気になったのですけれども、今、活断層の話がありますよね。大飯原発で今、また結論が延びましたと言いますよね。だけど、あれはなぜ割れているか分からないですね。

—— でも、「活断層だ」というのと、「ただずれているんだ」ということでしょうか。

—— なぜそういう意見になるのかというのは分からない。

—— はい。そこまでは新聞には書いてなかったです。

—— だから、専門家が分かれているのだけど、何が問題なのかというところが分からないと、たぶん聞いている人はもっと分からないのではないかと。

(木村) そうなのですよ。だから、「なぜ見解が割れているのかも知るようにしましょう」

と書いてあるのですが、専門家が教えてくれない。というか、専門家が知らない場合もあるかもしれない。

—— 分かっている、両方の見方があるということを知るほうが、私は大事なのかなと思ったのです。

—— この話の前提として、「知見が分かれている」ということが知らされていないと、素人の私たちはそれすら分かりませんよね。分かれているという事実があることすら。

—— A さんだけが来て、A さんだけが主張して、B さんの意見がなかったら、A さんを皆信用しますよね。

—— そうです。B さんの意見があるということも知らないこともありえますよね。一般的には。だから資料として、「このことについてはこれだけの知見があります」とか、「学術的にも意見が分かれているところですよ」みたいな、前提として示された上での話なのか、というのが。

—— でも、ここで「なぜ割れているのかも知るようにしましょう」と書いてありますよね。

—— 知るというのは、私たちがネットで調べたりということですか。

(木村) 専門家に話してもらおうということ。

—— そうすると、そういうことを話せる専門家の方を用意しなければいけないということですよ。

(木村) 専門家というのは、本来それができないと専門家ではないですからね。

—— 分からないような専門家はいらないと。

—— いらぬ。地質学は、専門家が 100 人いたら、100 人が違うのではないかと思うのですよね。そうすると、何が正しいか分からないので。

—— ちょっといいですか。コメントですけれども。

専門家の技術的論争の後ろに、個人的な信仰みたいなものが入っていると、これは話は

別なのです。何%の人が A という議論で、何%が B という意見を言っていますといったときに、B は何派の人とか、A は何派の人なんていうのを言うわけにもいかないし。だから、分からないは分からないで、何とかうまく表現する術を心得ないといけないですね。

賛成がどうのこうの、反対がどうのこうのという議論をする場ではなければ。それを議論する場ならばそれでもいいのだけれども。

(木村) ここで書いてあるのは意見の議論なので、分けましょうということなのですよ。

—— コミュニケーションをとるとというのは、一体何のコミュニケーションをとるのかという話で、A なら A というものの考え方をする人たちの場でのお互いの意見の交換なのか。

A と B と C、混ぜてやろうとすると、分けた基になっている考え方の違いに踏み込むことは非常に難しい。

その議論をしようというなら話は別ですが、そうでなかったら、その領域はの場合領域外ですというのを、司会者なり何なりがびしっとやらないと。

(木村) それは、たぶんファシリテーションの話ですよ。これはあくまでも、何を言っているのかをお互いがちゃんと整合的に理解できるようにするルールなので。

—— ただし、その方針を取ると、消化不良を起こして、かなり不満を持った人が出てきてしまう。

(木村) なので十分な時間が必要だと書いてあります。むしろ、それを言っただけで終わるとするのはコミュニケーションにならないというのがこの議論ですから。

—— 木村先生はこれで話は通じるとおっしゃいましたから。

(木村) いや、通じるかどうかは分からないですよ。

—— 通じるとして、9割とか1割という問題もあるけど、あるのかないのかのほうが重要だという話だから、ここでは、「認められている科学的な知見」なのか、「他にも意見があるのですか」ということを確認しながら進めていけばいいという感じですね。

(木村) 本当はそうです。

ここは、「正確」であるかどうかの小項目なのですよね。だから会話の中で「私はこういう話を聞いたよ」と伝えるときに、その「こういう話」が本当に正確なのかどうかということは、皆がその場で共有しないと、正確でなかった場合には曲がった事実に基づいて話

が進んでしまうと。そういうことですね。

—— そうすると、「他の意見があるのですか」とか、ファシリテーターがそういう話を向けないといけないのですか。聞いている人は分からないですよ。

(木村) 分かりません。本当のファシリテーターは、そういうことができる人でないと駄目なのです。一般の人がいきなり出てきてできるかという、難しく、ある程度の技能と役割がないとできない。

—— ある程度ではないですよ。勉強していると、かなりの能力がないとできないんだなって思います。

(木村) どうでしょうか。ここは、複数名が引っかかっているので、変えたほうがいいですか。

—— でも、ごめんなさい、自分で言うおいて申しわけないのですが、細々したことを入れるのはかなり難しいなと今思いましたので、さらっとこの感じでもいいのかなと思います。

(木村) どうでしょうか。

—— これは要するに、話をするときの心得ですよ。だから、中途半端に、「もしかして違う意見もあるのかな」で進めないで、そのときにそう思ったら、「別の考え方もありますよね？」とこちらから投げるとか。聞く側がこういうことを意識しなさいということですよ。

(木村) そういうことです。

—— そこをどこまで詰めるか、それは何対何ですかとかは、また違う問題で。

(木村) そうですね。では、心得として見れば、そんなに問題はないですか。では、ひとまずはこれでいきます。冷却期間を見てみましょうかね。しばらく眺めてみるというのも大切なので。

あとは私の中で気になったのは、「専門家に調べる時間をあげてもかまいません」。自分で作っておきながら、言葉が気になるのですよ。

—— 「調べる時間が必要なときもあります」とか。

(木村) そうですね。そのくらいにしましょうか。

—— 前回大事だと言っていたのがフェアネスとコンピテンスで、今のは専門性の話だと思うのですが、フェアという観点でいくと、1-3はどうやってみればいいですか。

—— 1-3はフェアは入ってきていないです。

(木村) フェアは、どちらかといえば場のルールになってくるので。ここで言うフェアは、どちらかというトレサビリティをちゃんと持てるかどうかです。どこまで追認できるか。元のデータまで遡って、その正しさを皆が確認できると。

—— 他の論理があるのを知っているのだけど、そんなことは言わないで、自分だけの論理を主張するというやり方があるような。ディベートのようなやり方があるような気もするのですよ。そういうことを規制しないとイケないのではないかという気がするのです。

(木村) そうなのですよ。今回は専門家が専門家として話すということはしないので、いいのかなと思うのですが、本来はこれを裏返した、専門家が話すときに何を気をつけないといけないかというマニュアルも対で作れるのですよね。

おっしゃる通りで、本当はそういうことをしては駄目なのです。だから、講演を願うときには、講師に、これを心得でお願いしますって渡すとか(笑)。

—— それはいいな。

(木村) それは、裏返したらできるなと思っていて。この部分に関しては特に。やはり専門家は、自分が話すことが正確かどうか責任を持たないといけないですからね。責任を持つというのはどういうことなのかというのを、ちゃんと心得として持っておかないといけないのだろうなと、これを書きながら思っていました。

では、「時間をあげてもかまいません」のところは、「必要なときもあります」ということですね。他はよろしいでしょうか。

それでは次にいきたいと思います。1-4 [規則]の話で意識すること、こちらはいかがでしょうか。

—— 別に分からないことではないのですが、感想ですが、「そのつながりやルールに関係する人たち全員の価値基準や利害を尊重し」とか、他のところにも「尊重する」が

出てきますけど、この尊重っていいなと思いました。大事だなと思って。それがきちんとできれば、いいのですけどね、という感じです。

—— でも、自分は尊重していると思っても、他から見たら全然尊重していないと見える場合もありますよね。

—— 難しい。

(木村) ここが一番苦労したところですね。

—— 「これをするための方法論もいくつかあります」みたいなことが書かれていますけど、だからそれは何？ というのは思いました。

(木村) そう、私もそれは思っています。でも、具体的な方法論の紹介はなかったですよ。

(竹中) ないですね。

—— 最初の項目の「社会的正当性」というのは、全員の価値基準や利害を尊重し、と書いているのですけれども、これが今回のフォーラムでうまくいくのかなという気がするのですよね。

(木村) 尊重というのは、必ずしも全員の話の中に入れるということではないのですよね。そこが難しいことなのですよね。そのセンスを皆が共有しないといけない。

—— そうですよ。(そうではないと) 議論にならないのですよね。

—— 理解はするけれども、この場合はその人の意見は入らないという場合があるということですよ。だけど、それをけなしたり否定するのではなくて、よりよい道を見つけたら、こちらになりましたということ、皆で納得するということですよ。

(木村) 自分の意見とか提案が通らなかったとしても、その人も、まあでもそういう結果だったら構わない、ということと言えるような心でいなさいということなのですけれども。

—— そういう心得を持っていないと、3 ページの「お互いの価値基準を知った上で、皆が

共有できる土台をつくる努力をしましょう」はすごく難しいですよ。だから基本的な見方とか気持ちとか、皆でちゃんと作ります、なんとかいいものにしますというのをどこかに入れるといいですよ。難しい、文章が。

—— 難しいですよ。ここに関して具体的に何か書いてあることはあるのですか。

(竹中) いや、ここはほとんど説明が書いていないので。

(木村) まあ私も、端っこから元気ネットさんの活動を見させていただいて、ああ、こういうことだろうなと思って書いているので。

—— やはりまだまだ尊重が足りない。

(木村) いえいえ。この土台を作る努力をなされているなということです。そこがうまくいかないときには簡単に失敗するし、話し合いに参加していた人たちが不満になりますよね。この辺りは、そういう事例みたいなものがあるといいのですけどね。

—— 木村先生が見ていて、こういう場合って、意外とあるのではないですか。

(木村) 意外とあるし、私がファシリテーターをするときには分かった上で無視するときもありますね。全部やってたら時間内に終わらないとか。今日は時間内に終わらせるほうが重要だ、みたいなときは無視してしまったりするので。

—— 無視してしまうというのは、無視しているように見せないテクニックはあるのですか。

(木村) テクニックはないでしょうね。やはり時間はどうしてもかかってしまうと思うのですよ。

—— 何となくスルーしちゃうみたいな感じですか。

(木村) うん、何となくスルーしちゃうんですね。

—— でも、スルーされた人も、納得できないと後でまた蒸し返してくるから。その後の内容がある程度納得できるものだったら蒸し返してこないのだけど、そうでなかったら、必ず最後のころに蒸し返してきますね。

(木村) 蒸し返しますね。

あとは、漠然とした、もやもやして分からないことがあるのだけど、それをどう言葉に出していいか分からない人は、最後まで蒸し返す論理が組み立たないことがあるのですよ。そうすると蒸し返してこないで、時間がないときは、ああ、この人は言いたそうだけど、言葉にならなそうだから無視しようということによくありましたが、本来はそれはしてはいけないということですよ。

たぶん、〔感情〕のほうで出てくるのですけど、もやもやしたものは、「もやもやしている」と言ってもらって、何がもやもやしているのかを整理して、〔論理〕の話とか〔規則〕の話に持っていくということをしなさいといけない。もやもやが本当に〔感情〕に根付くものだったら、〔感情〕で議論しないといけない。そういうことをファシリテーションしてあげないと、もやもやがあるまま、何となくそれっぽいもののできあがったから、まあいいかといって、次に進んでしまう。

そういうときには、私はたまにスルーしたりしてしまいますけど。本当はよくないなどは分かってはいますけどね。

—— でも、もやもやしている本人も明確に言葉でできないということは、やはり本人の勉強不足とかもあるかもしれないし。うまく表現できなかったから、もう少し自分の中で考えてみようと思ち帰ることはあると思うのですよね。不満があるとすれば、自分のそういうところに気がついたと思ってくれるといいのだけど。

—— そうはなかなかいかない。どちらかというと、運営が悪い、やり方が悪いとか、そういうふうに言われますよね。

—— そうですね。

(木村) それなので、これは次の話題になりますけど、〔感情〕の話で意識することで、2つ目は「皆の前で自分の中の意見や感情を話す前に、まず、友達や同僚と話して、自分の中の意見や感情を整理しましょう」というのが入っています。

—— これは本当に文献に入っていたのですよね。これは大事ですよ。

(木村) 入っていたのですよ。これはすごいと思って。もやもやしたら、1回ちゃんと整理しないと、何がもやもやなのかが分からないということが書いてあって。

—— 前回こんな言葉が入っていたのかしらって、一瞬思ったのですけど。

(木村) 一応入っていたのですよね。

—— 表現はどうだったのですか。

(竹中) 前回ですか。「参加者同士ではなく、友達や同僚と打ち解けた形で感情に関する会話を行なう機会がありますか」という文章です。

—— これがたくさんできればできるほど、自分の中のものがいろいろ整理されていくし、その段階でもう解決できるものもいっぱいあるのですよね。

—— でも、このコミュニケーション・マニュアルは、事前にある程度理解しておかないと。

(木村) もったいないですよね。だから、参加者が決まったら送るとか。落選ですけれど、マニュアルだけはお送りしますってあげるとか。そういうのがいいかもしれないですよね。

—— ただ、行間があるから、今言ったような話をすればよく分かりますけど、もらった人は、これを読んでもなかなか分からないかもしれない。

(木村) そうか、経験していない人は分からないかもしれないですね。

—— これは、ファシリテーター資料につけてもいいかもしれない。

(木村) どうぞ。適当に使ってくださればと思います。

—— 質問いいですか。3 ページの 5 つ目の四角のところですけど、「また、その人が生活している環境や、仕事上の都合で、話している事柄に関する情報が不足していたり」とあるんですけど、

(木村) ああ〔感情〕のほうですね。1-4 はもう大丈夫ですか。先ほど私がフライングしてしまったので、申しわけなかったです。方法論の部分は、私も気にはなっているので、少し考えましょう。

では、1-5、どうぞ。

—— 「また、その人が生活している環境や、仕事上の都合で、話している事柄に関する情報が不足していたり、意見や感情が偏ったものになったりすることがあるので、そのことを皆で認識しましょう」と書いてありますが、「そのこと」というのは、その人が生活している環境などが原因で偏った意見になることがあることを認識するのか。それともその人の意見や感情そのものが偏っているということをその場で認識するのか。

(木村) これは前者だと私は認識しているのですけれども。その人が、生活していたり仕事していたり、いろいろ制限があるので、手に入る情報や考え方がどうしても一部になるということが、誰でもあるよね、ということを認識しましょうということです。

—— 「誰でも」そういうことがあるということを言いたいわけですね。「この人」がではなくて。

—— お互い、皆そういうことがあるよね、ということですよね。

(木村) そうか。そこがダブルミーニングにならないように調整しましょう。

—— 「お互いに」が入るとよく分かりますよね。「その人」というと「その人だけが偏っている」というイメージになるけど。

—— これは翻訳的な表現なのですよ。「その人が」を主語にしているから。

—— (英語は) 主語が必ず入るからね。でも、「お互いに」そういうことを理解しようと言うと、相手も自分もと思えるから、そういう言葉が入ったほうがいいかもしれない。

(木村) 日本語だと「誰もが」とかでしょうか。「また、誰もが生活している環境云々で偏ったものになるものなので、それをお互いに認識しましょう」にしましょうか。

—— ああ、いいですね。

—— 「もの」が続きますけど、いいですか。

—— 「意見や感情が偏ったりすることがあるので」。

(木村) 「偏ったりすることがあるので、それをお互いに認識しましょう」にしましょう。

—— 今のだったら「そのこと」でもいいような気がしますけどね。

(木村) では、「そのこと」にしましょう。

他はいかがでしょうか。日本語って難しいですね。何か論文チックだと思っちゃうんだよね。

(竹中) いや、私が最初に作ったものよりだいぶよくなりましたよ。

—— 共通しているのは、どれも時間がかかりますよ、と言っていますよね。

(木村) でも、これは時間がかかりますよね。

—— 実際はフォーラムは 5 回でしょう。だから、たどり着けるかどうか分からないですね。

(木村) 分からない。自己紹介で終わっちゃうかもしれない。

—— 1-5の〔感情〕のところに、「協働していく土台をつくるほうがはるかに大切です」と、「協働していく土台をつくってから」とありますよね。「協働」というのは、話し合うだけではなくて、一緒に行動というのでしょうか、それも含めて「協働」と書いてあるのですよね。

(木村) 一応その話が入っていますね。これは **cooperation** という英語なのですよね。だから、一緒に動かしていく。

ここは何を言っているかという、感情を言って、お互いに理解するだけではなくて、そこから何かを生み出す土台を作りましょうという話なのです。

1-4にも似たような話がありますが、1-4はルールの話をしているので、ルールとして共有できる土台を作って、お話をしましょうという段階です。

下の土台と上の土台はレベルが違うのですよ。

—— ここは、コミュニケーションでいうと、共感とか受容に近いのかなと私は読んでいて感じたのですよ。あなたはそういうふうに思っているのですね、ということを受け止めるというか。人の話を聞くときには、そういうことを最初にやるのですよね。

(木村) その話は、実はその上の階層にあるのです。すでに。

—— 信頼関係を作るとか、そういうことを言っているのかなと私は読んだのですが。

—— なんとなく木村先生の言うことは分かるのだけれども、「協働」という言葉は、皆意味は分かるのかしらと思って。この字って、定義されているのかしら。

—— 私は分かるけど、どうですか。

—— 3、4年前から、「協働」はいたるところで使われている気がするのですが。

—— 字はいたるところにある。けれど、いたるところにあるだけで、共通の認識はあるのかなと思って。「共働」だったり、協力の協だったり、

—— 共に動くだったり。

—— そう、「キョウドウ」はいっぱいあるのですよ。けれど、同じ認識になっているかどうか。

—— 漢字で読むと、「協力して働く」と単純に理解できるのかなと私は思っていたのですが。素直に受け止めて。

—— 要するに、一緒に同じことをするという意味に取るわけでしょう。それでいいということですよ。

—— それでいいのだけど、もう少し素直に書いたほうがいいのでは？

(木村) 口語っぽく言うなら、「次の一歩を踏み出す」なのですが、それは少し違うなと思って。

—— これは cooperate を訳したのですか。

(竹中) cooperation です。この文章は、前回は直訳をしていたのですが、それを読みやすい日本語に変えて、コミュニケーション・マニュアルにしたというものです。

—— また基本問題に戻って恐縮ですけど、ある場でコミュニケーションをするのだと思いますが、そのコミュニケーションという活動そのものを、協働の「働」と取っているの

ではないでしょうか。それを基に何か作業をしようというのではなくて。

(木村) これは、コミュニケーションをやることが目的では駄目なのです。コミュニケーションをとるのはあくまで手段であって、何かを達成するという目的があるからコミュニケーションをとるといふものなのです。

—— 何かを達成するという活動は、ちゃんとイメージにあるわけですね。

(木村) 少なくとも、このチェックリストではそういうことです。

—— そうですか。それなら「働」が入ってもいいわけですね。

(木村) そうなのです。その目的は、いろいろなものがあるのですね。例えば、規制を作りましょうというコミュニケーションだったり。私たちがこれからやろうとしている「フォーラム」というのは、お互い分かり合いましょう、というのが目的なので、そのためにいろいろやると。それ自体が「協働」になってくるということです。

—— そういう意味で「働」が入ってもよろしいのですね。

(木村) そうなのです。

さっきまでの議論は、「協働」という言葉は、定義が人によって振れ幅が大きいから、使うのをやめたほうがいいのではないかという話です。

—— 「次の一歩に向けて協働して」みたいに、一言入れると分かるような感じがしますね。

—— 「協働」を使いながら、さらに補う言葉を入れるということですね。

—— もしくは、「協力して活動しましょう」とか。

(木村) 「次の一歩」は（意味が）分かりますか？ 「次のステップ」ってやつですよ。ね。

—— 原文にそういうイメージはありますか？

(木村) そもそも Habermas がそういう考え方ですから。コミュニケーションをとる目

的は、そもそもそういう社会を成立させるためなので。

—— そうなのですよ。単に言い合っているだけでは仕方がないので。そこから何を生み出していくかということの手段なのですよ。

(木村) そうなのですよ。

—— そういうことを具体的に書いたほうが、分かるかな。

—— 質問したいのですが、下から 2 番目に「他の人が話した意見や感情を考えなしに否定しないようにしましょう」とありますよね。非常によく分かるのですが、逆に言えば、考えがあったら否定してもいいということなのですか。

(木村) 尊重した上でならいいのだと思います。

—— そうすると、その言葉を入れたほうがいいのではないのでしょうか。「お互いの考えを尊重した上で、否定しないようにしましょう」。

—— でも、話し合いの中では否定する場合がありますよね。尊重はするけれども、理解もするけれども、でも私はそれは違うと思いますよと発言したり。

—— いや、「尊重した上で」という言葉がないと。相手を完全に否定してしまうと、尊重していないような気がするのです。

—— 考えなしにというのは、「それはおかしいでしょう!」とか、そういうことでしょうか。

(木村) そうです。ちゃんと受け取って、いろいろ整理してからにしましょうと。

—— ただ、「考えなし」というと少し…。「相手の立場を考える」とかにしないと。

(木村) 「尊重することなしに」をつけるとか。

—— そうですね。「尊重」という言葉を入れたほうがいいかなと思います。

—— よくやるのは、「あなたはそういう意見なのですね。そして、私はこう思うのです」と言うと、けんかが少なくて済むと。そうすると並列になるからいいですと。たぶんそう

いうことではないかな。

—— 「考えなしに」ではなくて、「感情的に否定しない」とか。

(木村) 「感情的に」にしておきますか。ちょっと違うかな。

—— 「尊重することなしに否定しない」にしますか。まどろっこしいですよ。

—— 「考えなし」のほうがいいと思います。「考えなし」のほうが分かりやすいですよ。

—— 「考えなし」イコール「尊重していない」ということでしょうか。

—— 私は、「考えなし」というのは、乱暴すぎる言葉かなと思ったのですよ。

(木村) 元々は何だったかな。

この「考えなし」は、竹中君がどこかで言った言葉をここに入れたのですよ。あ、「道徳、価値に基づく考えを否定しないようにしましょう」のところだ。そこも「考えなしに」みたいなフレーズが入っていたのですけど。

でも、ここの意味は、まさにおっしゃる通りです。ちゃんと尊重して、しっかりと議論できるベースで議論をして、否定をするなら否定しましょうということなのですけど。

—— では、「他の人が話した意見や感情を否定する場合には～」と逆に書くのはどうですか。

(木村) 否定することを積極的に勧めていないのですよね。

(竹中) 元の文章は、協働するということ、皆が同じ方向を向くということの重要性、その大切さというのですかね、それを議論しましょう、と言っているのです。

—— 同じ方向を向いていく？

(木村) 同じ方向というか、少なくともコミュニケーションの場の目的を共有して、そこに一歩踏み出すことが大切ということです。

—— 多少の意見の違いはあっても。

—— 今のフレーズはいいんじゃないですか？

—— 原文に、「他の人が話した意見や感情を考えなしに否定しないようにしましょう」にあたる文があるわけではないのですか。

(竹中) あるわけではないですね。

—— 今の「多少の意見の違いはあっても」というフレーズがナイスだと思うのです。

(木村) 「多少の意見の違いがあっても」ですね。そうすると、「他の人」とかは入れなくて、「多少の意見の違いがあっても、否定しないようにしましょう」にしましょうか。それでいいですよ。

—— 大切なことですよ。私たちが常に心してこれをやりましょう。

—— 私もそれでいいと思います。

(木村) ええと、それから、「協働」についてですが、協力していく、くらいにしますか。協力と協働は、少し違うのですよね。

—— 「協働」は、自分も積極的に関わるという意味ですよ。「協力」というのは、まあ、気持ちだけでも協力になるので。応援してますって。やはり外野的なのですよ。

—— 「次の目的」と書くと、目的は何だろうってなってしまうから、やはり「次のステップ」のほうが私はいい気がするのです。

(木村) 「次のステップに向けて」くらいがいいでしょうか。

—— それはいいですね。

(木村) そうしましょう。「次のステップに向けて協働していく土台をつくるほうが大切です」。これでいいと思います。

あとは、先ほどの信頼の話ですが、共感の話は、1つ上の段に入っているのです。「他の人の意見や感情を聞くときは、その人の立場になって、なぜその人がそのような意見や感情を話すのか、理解するよう心がけましょう」。これがたぶん、**empathy** (エンパシー) です。日本語だと共感**sympathy** (シンパシー) で訳すんですけど、エンパシーとシンパシ

一があつて。私の理解では、エンパシーは理性的に相手を理解しようとする心。相手を理解するというのがエンパシー。シンパシーは、一緒になってしまうこと。

—— 同情とかですね。そういう意味はここにはないですからね。

(木村) そうです。シンパシーには同情が入ってくる。

私の中では、「和して同ぜず」の和はエンパシーで、同はシンパシーです。私の中ではですよ。そういう区別をしていて。同するのは小人のやることなので、あまり同してはいけないのです。

—— それは木村理論ですか。

(木村) 私の理論です。

少し脱線しすぎですけど、山岸さんが構築している信頼のモデルでは、「意図信頼」と「能力信頼」に分けて考えています。信頼というのは、その2つの要素でできるのです。「意図」の中には真摯さとか、いろいろな要素が入っているのですが、この中に「共感」もあるのです。意図、「ああ、この人だったら自分たちに害を与えるようなことはしないな」と思えるようなことは、信頼の一要素に入るのですけれども、その一要素として「共感」があるのです。これはたぶんエンパシーなのですね。理性的に考えて、相手は自分のことをしっかり理解しようとしてくれている、というのがエンパシー。

もうひとつ、信頼の理論にはSVSモデルというのがあります。これも、共感する相手に信頼感をもつという理論があるのですが、こちらの共感シンパシーなのですよ。自分に似たものは信頼しやすいという理論です。その人がやることは、なんとなく安心して受け入れてしまうというモデル。相手のことを深く理解して何かしようというのではなくて、安心をどうやったら得られるかという構図の中で信頼を得るとというのが、SVSモデルといわれるものです。

というふうに、山岸先生の弟子さんが言っていました。そういうところに根本的な差があるのですよ、と言っていましたね。

—— エンパシーは理性的共感、シンパシーは感情的共感とか。

(木村) そんな感じですよ。同じ人になっちゃうのがシンパシーかなと。要は、その人に安心して全部委ねてしまう。そういう信頼のモードになると、シンパシーになってしまうのですよね。

—— そうすると、シンパシーがあつて、大きな枠でエンパシーがあると考えていいので

すか（内包）。それとも、重なる部分はあるけど、別のものなのですか。

（木村） 私の中では、行き過ぎるとシンパシーになってしまうというイメージですよ。

—— やはりどこか違いがあるのですね。

（木村） 違いはあります。

—— 集合論的には、こういう感じなのですか（重なりがある）？

（木村） そういうイメージでしょうね。相手のことを理解しようとする、感情論的に理解していくところもあって、ともすれば涙が出ることもあるかもしれないけれども、そこで一緒に怒っては駄目なのですよ。怒ってしまうのがたぶんシンパシーですよ。

そこは、相手の問題だからということで一旦自分を離して、冷静に見る目を持っておくというのがエンパシーかな。これは日本語にはない言葉なので。脱線しましたが、そんな感じです。

他はいかがでしょうか。では、前段に関してはこんなところでよろしいでしょうか。

では次は「2. ファシリテーションルール」についてですが、今日は無理ですかね。

（竹中） そうですね。まだ議論できる段階ではないです。

（木村） 1は、どちらかといえばコミュニケーションをする内部の人たちがどういうことを考えるべきかということを書いていたのですけれども、2は、どちらかといえば会合の場をどうやって仕切っていくか、その中で意思決定をしていくときにはどういう手順でやるのかとか、そういうことが書かれています。

2に関しては、私と竹中君でもう少し考えましょう。

（竹中） ファシリテーションルールは、これだけで十分なのでしょうか。

（木村） ではないと思います。

（竹中） ではないですよ。それをどこかから持ってくるといったときに、持ってくる元はどこですか。

（木村） それは経験値です。

—— ということは、こういうものが足りないということを、どんどん言ってもらえないと。

(木村) そうです。だから次回それをコメントしてもらいましょう。  
部屋の関係からすると、予備フォーラムは次々回のほうがいいのですよね。

—— そうですね。30日は狭い部屋になるかもしれないので。

(木村) 元々は30日に予備フォーラムという形でしたけれども、今回はこのマニュアルを確定して、次々回はそれに基づいて予備フォーラムをするという方向でやろうかなと思います。

なので、次回までにファシリテーションルールを少し整理をして、元気ネットさんからコメントをいただきたいと思います。何か、いいサンプルとかありますか。

—— ファシリテーションルールですか。ルールはいろいろあるのですが、なかなか実践で活かせないのですよね。

(木村) 今回はいろいろ情報を寄せ集めて、方針を見るということをやりたいと思いますので、よろしくお願いします。

ということで、コミュニケーション・マニュアルについては以上ですけれども、何かご意見はありますか。

—— すみません、表のところで、「埋立地とはゴミを清潔に」というところは、「適切に」に変えたと思うのですが。

(木村) そうですね。「清潔に処理して埋める」はおかしいという話でしたね。「適切」ですね。

それでは、前半はここまでということで、一旦休憩を入れましょう。

## 2. 「フォーラム計画書」の検討

(木村) それでは後半を始めていきたいと思います。

後半は「フォーラム計画書」の検討をやっていきたいのですが、その前に、元気ネットさんからご提供いただいた「放射線学び合い BOOK」について、少しご説明いただきたいと思います。こういうワークショップを開くときにどういう手順で行っていくか

ということがまとめられていますので、こういうものを作っていくとやりやすいですという話をご紹介いただいてから、我々のものも作っていきたいと思います。では資料 F6-7 について、鬼沢さんからご紹介をいただいてよろしいですか。

(鬼沢) 元気ネットがこの 6 年間、地域で高レベル放射性廃棄物のワークショップを開いてきているのですが、そちらのマニュアルも今年作るのですが、その前に、震災以降放射線について不安に思っている方が多いものですから、放射線についていろいろ学んだりする公募事業があって、そこに応募したのですよ。地域でワークショップを開催する簡単なガイドブックを作ったらどうだろうかということで。それで採択されたものですから、テーマは放射線についての学び合いにしているのですが、中身はほとんど今まで地域で高レベル放射性廃棄物のワークショップを開いてきたものを基に作っています。

ただ、あまり丁寧に細かくしてしまうと、初めて開いてみようと思う方にとってはハードルが高いかないというのがあって、本当に基本の部分だけの簡単なものになっています。

それぞれ今までの経験から、分担して書いたのですけれども。ですから、9 月末に東大で木村先生のところでやらせていただいた熟議型のワークショップのときの写真もそのまま使っているのです。そんな感じで作っています。

流れとしましては、中を開いていただきますと、このガイドブックを作ったいきさつが書いてあります。ぜひ地域で、こういう学びあいの場作りをしてくださいということが、2 ページ、3 ページに書いてあります。

ワークショップを開くにあたっての大まかな流れとしては、1 番から 5 番にあるように、企画を考えて、準備をして、直前にこんな準備をして、というふうに、初めて開く方も分かるような形にしています。

5 ページの一番右に、ファシリテーターとはどんなことをするかということが簡単に書いてあります。書ききれない部分はたくさんあるのですが、あまり長くても読んでいただけないかなというのがありまして。

実は、原稿ができた段階で、12 月 19 日に、全国の地域の方 11 人に集まっていただいて、これを見ていただいて、足りないところは何だろうか、もっとほしい情報は何だろうかというワークショップをしました。そのときに、やはり一番大事なのは最初の企画作りではないかということで、2 つのグループに分かれて、簡単な企画作りをしながら、テキストを見ながら、足りているところ、足りていないところの意見出しをしました。

続きを見ていただくと、まず 6 ページに、「企画」のことが本当に簡単に書いてあります。文章じゃなくて見ていただけるように表になっています。項目。具体的に何をすればいいか。それをやるにあたって困ったことは何か。分からなかったらここを見てください、分からなかったら元気ネットに相談してくださいみたいに、本当に簡単なテキストにしています。

次に「準備」、どんな役割があって、どんなことを準備しないとイケないか。ここに参考

図書として傘木宏夫さんの本を紹介しています。傘木さんは、大町市の方で、ワークショップを開きながら NPO の活動をしている方です。木村先生が先日ご紹介していたような、簡単な時間軸の例が載っていますので、これも結構参考になるかなと思います。先生がご紹介いただいた本は、たぶん学術的な本だと思うのですが、これは本当に田舎の地域で開いている実践編の本だと思います。

8 ページが当日のプログラムの例です。これはあくまでも簡単な例で、本当は 130 分では難しいのですが、実は今回この編集に関わってくくださった若い方の意見を活かしました。それは、私たちこういう年代だけではなくて、もっと若い方にこういう学びあいの場に参加していただきたいという思いがありまして。若い方たちだったら、どういう時間配分だったら参加する気になるだろうかということで、120 分を越えると難しいと言われたのですね。だから、準備も含めて 130 分程度のワークショップにしました。これを 1 回やってみて、ああ、よかったね、もっとやりたいねというときは、グループワークの時間を徐々に伸ばしていくとか、そういう工夫をしていただきたいというのがあって、最初は非常にハードルを低く、簡単に開けるような形にしています。

3 ページには、なぜワークショップなのか、と書いてあります。講演会形式の学びあいでもいいですということはお願いしているのですね。でも、私たちの経験として、単に講演会で一方的に情報提供で聞くよりは、ワークショップで自由に自分の意見が言えるということが、自分の中の不安や疑問の解決にはいいなと思っていたものですから、ワークショップを開いてみようというテキストにしています。

9 ページ目が「直前」ということで、数日前までにこんな準備が整っていればいいですということ。

次が、当日の準備です。会場設営の例から、名札の作り方とか、そういうことを載せています。

12、13 ページが、一番大切な、当日の進行管理で気をつけないといけない部分を簡単に書いています。ここもかなりの情報量があったのですが、ページに収めるために本当に大事なことに絞っています。それと、後ろのほうにコピーしてそのまま使える資料をつけていますので、関連の資料がどこかということも表示しております。

見ていただくと分かると思うのですが、3 ページの「ワークショップを開いてみよう」というところに芽が出ているイラストがあると思います。やっとなワークショップが開ける当日、13 ページには花が咲いている絵を入れておりますけれども、ここまでが、やはり初めて開こうとするときに大変だということで、まあ当日の内容がどうなったかはともかくとして、ワークショップを開いてみたということで、花が咲いているイラストになります。

次のページが、終わった後の評価として、今後継続するなり、他の形で活かすなりを考える。こういうことをしておくといいですよというものです。

次のページから、こういった資料をいちいち作らなくてもいいように、私たちが普段ワークショップで使っている資料を簡単にしたもの、そのままコピーして使えるような形

でつけております。企画書に関しては、この程度の企画書を作っておくと、何か申請を出すときにもこの程度のものは必要だとか、その報告にも使えるようにしています。

19 ページには、当日のファシリテーターをしていただく方用に、簡単な打ち合わせ資料を 1 ページにまとめています。私たちが開く地域ワークショップのときには 3 枚あるのですけれども、その中の本当に注意していただきたいことだけを入れて 1 枚にしております。

次は、参加していただいた方への簡単なアンケートです。

それと、ワークショップを開いた後、どうだったかという報告書をつけております。

最後の 2 ページは放射線に関する参考資料で、実際に作るときには最後の 2 ページはカラーになるようにしています。

こういう状況です。何かご質問がありましたら。

—— ファシリテーターはどのように選ぶのですか。

—— 今までの私たちのワークショップは、地域のいろいろな活動をしている方にグループ進行をお願いをしています。

—— 地元の人ですね？

—— はい。地元の方をお願いをしています。

—— 学者さんとか？

—— まあ、いろいろですけど。NPO だったり、いろいろな活動をされている方。大学の先生もいたりしますし、いろいろです。

—— なるほど。ときによって人は変わっていくわけですね。

—— はい。

今回の「学び合い BOOK」でも、ファシリテーターに関しては、そのように選んでいただいてもいいし、例えば自分たちの団体の中でやってみようと思ったら、そのグループの中の方がしてくださってもいいし、ということにしています。

—— それは誰が決めるのですか。どこでやりましょうと決まりますよね、その地域の方と相談しながら決めるのですか。

—— 今まで私たちがやってきたワークショップはそうです。

—— この本は、そういう地域の方たちに、これを参考に自立してやってくださいというものなので、そのときの企画メンバーで決めるということになります。

—— そういうときに、ファシリテーターはこういう人がいいのではないですかと助言をすることはあるのですか。

—— 聞かれれば。

なるべく地域の方に積極的に開いてほしいという思いで、これはだから、これまで私たちのワークショップに関係してくださった、ファシリテーターをしてくださった皆さんにお送りする資料です。だからある程度のことは何回か経験されている方が、これを基に、もうちょっと簡単な形で、地域で放射線についてのワークショップをしてみよう、というものなのです。

例えば、19 ページの当日ファシリテーター打ち合わせ資料に、ファシリテーターの役割というのがありますが、(F6-6 の) ファシリテーションルールの中にも当然このくらいのことは書かれているなと思って見ていましたので、ここからの追加はないとは思いますが。

—— 私が質問した根本は、今度我々がフォーラムをやるときに、どのくらい前から準備をして、ファシリテーターさんと相談しながら、進め方を決めないといけないのかなと思ったものですから。

(木村) ファシリテーターは元気ネットの方々をお願いするので。

—— でもなかなか、この次はこうしたいと思っていてもできないのが現実です。

—— 場の雰囲気にはやはり飲まれてしまうのですか。参加者によってしまうのですか。

—— そうですね。当日集まった参加者によりますね。

—— それと、今までのワークショップの中では、私たちはサブとしてつきますので、主に見える化のお手伝いとか、司会がうまくいかないときの補助みたいな役割です。それで、メインのファシリテーターの方(地域の方)に遠慮してしまうときがあるのですよ。これはまずいなと思っても、方向転換したくても、あまりでしゃばると悪いかなとか、そういうのでうまくいかないことがあります。

—— 私たちが、意思を持った方向に動かしていると見えてしまうとまずいので。

—— メインの方を立てつつ、うまくいくようにするのはすごく難しいです。

—— ファシリテーターは、男性と女性と、どちらのほうがいいのですか。

—— あまり関係ないですね。

—— 性差はあまりないのですか。

(木村) 個人差のほうが大きいですよ。

—— そう、個人差のほうが大きいです。

(木村) まあ、ファシリテーターの数がそもそも少ないですからね。あまり統計的に男女差というのはないでしょうね。

—— 言い訳のように聞こえるかもしれませんが、私たちのワークショップは、ファシリテーターが向いているからお願いをしているわけではないのです。

—— 技術を持っているとか、そういうことではないのです。

—— なぜかといいますと、私たちがやっている高レベル放射性廃棄物のワークショップは、今まで地域で話題にもしたことがない人たち、というのが現実だったので、今後地域でこういうテーマを話題にしていきたいというのが、一番私たちが大事だと思っていることなのです。その地域でいろいろな活動をしている方たちにファシリテーターとして関わっていただくことで、今後地域で広がっていきけるということを一番の目的にしています。

ファシリテーターのうまい人だったら、東京から誰か連れていったほうが早いわけですが、それでは地域のその後の継続がないので、それはやめているのです。地域の方に、自分たちのこととして考えていただくという今後の継続も考えて、今まで地域でいろいろな活動をしている方をお願いをしているということです。だから、向いているか向いていないかは、申しわけないですけど、関係なくお願いしているところがあります。

でも、それも訓練だと私は思うのです。場数だと思うのです。この5年間やってきて、5年間ずっと関わっている方は、多少うまくなっている人もいれば、5年間やっているけどやはり、という人もいます。ファシリテーターは向かないけど、人集めは向いているとか。

—— パネリストとしては問題はないけど、ファシリテーターとしては、というのがあるのではないですか。

—— ファシリテーターに向いている人というのは、そうはいないです。だから、そのくらい難しいのだと思います。

—— あとは、先ほど言いましたけど、この打ち合わせ資料のもっと詳しいものを 2 週間前くらいにお送りしているのですね。事前に。それで当日は 30 分程度のファシリテーター打ち合わせというのを直前にやっているのです。でも、いざ始まってみると、全然言うことを聞かない。聞いていなかったのかな。理解していなかったのかな、みたいな展開が結構多いですよ。

—— 参加者以上にガンガン自分が話しちゃったり。

—— 私は、東大で教えているのですが、このあいだもパネルディスカッションをやらせたのですね。ファシリテーターの役をやった人もいまして。

ライトをつけると、皆パニックになるのですよ。

—— スポットライト？

—— スポットライトを当てるのですよ、わざわざ。

—— 発言者にとということですか。

—— いやいや、常に入れるのです。パネルディスカッションをする前に、パワーポイントでやるでしょう。ところが、ライトをつけると、皆一瞬無言になるのですよ。

やはり場数をやらないといけないのと、先ほど言ったように、打ち合わせしたのに全然違うことをやる人はいるのですよ。面白いですよ。

—— 自分は決してうまくできないのですけれども、よくない事例もいっぱい見ているから、ああ、こうやるとよくないよねというのは、かなり蓄積はありますね。

(木村) 失敗学ですね。

—— ファシリテーターにはどういう資質が大切なのでしょう。

—— うまくいっている人の共通点はありますか。

—— それはやはり、人の意見をしっかり聞くこと。でも、長く自分の持論をおっしゃる方がいたら、やはり皆さんにちゃんと発言していただこうと思ったら、ある程度のところで切るとか。話を展開できるとか。話が違う方向にってしまったなと思ったら、それをもう1回戻すとか。そういう臨機応変さだと思います。

—— ベストセラーの「聞く力」というのは、1対1の話ですよね。ファシリテートというのは、グループですよね。

—— グループです。特に私たちがやっているのはグループワークなので、1人の意見だけを聞くのではなくて、それを皆で共有しながら、その意見から次の話にどう展開していくか、という臨機応変さがあると、意外と参加者は満足します。

—— そうすると、最初から方向性を持っているわけではなくて、出てきたものから方向を生み出すということですか。

—— そうです。だって、集まった人がどういう人かは、一巡してみないと本当に分からないのです。ガンガンすごいことを言う人もいれば、一言も話さない人もいます。

—— 話したくても言葉に出せない人もいらっしゃるのです。

—— 11ページの写真で、紙を前にして議論していますよね。

—— それは発表です。グループで発表している写真です。

—— このときは、発表するときに時間を与えるわけですか。

—— そうです。グループで話し合ったことを模造紙に見える化してまとめて、各グループがどんな話し合いをしたかを発表する時間を最後に持っているのです。自分のグループはこんな話し合いをした、は分かるのですが、お隣が全然違う内容の話し合いをしている場合があるので、それを共有する時間を持っています。

—— そのときにファシリテーターは、そのグループに入って、議論には入らないのですか。

—— 議論はしますけど、発表はこのグループの中の人です。

—— それはいいのですが、グループで議論をしますよね。そのときにファシリテーターはどうしているのですか。

—— 総合ファシリテーターは1人いるのです。それとは別に、グループワークは、地域の方にファシリテーターをしていただくと。

—— 各島に1人ずついるのです。

—— ああ、2種類あるということね。

—— そうです。総合ファシリテーターはうまく仕切るので、このグループワークのことを今私は言っているのですけれども。

—— たぶん、この見える化のところは、今までこのフォーラムの話では出ていないですよ。

—— ホワイトボードに貼っていますよね。そのグループの代表が来て、他のグループに対して説明していると。

—— そうです。全員に、このグループはどんな話し合いをしたかということを発表をしています。

(木村) やはり話し合いの共有は大切なフェイズで、満足度が高くなる要因なのですよ。

—— そうなのです。それと、この発表の後に出る質問が、実は一番大事なのですよ。

(木村) なかなか出ないですけどね。出始めるとワーッとなるんですけどね。

—— グループが変われば、またシェアして、質問するわけですよ。

—— そうです。

—— ロールプレイみたいですよ。

—— この見える化の仕方もグループによって様々です。それもグループのファシリテーターに任せているけれども、ちょっと難しいので、私たちがいつもサブでグループに入ると。だから、元気ネットのメンバーは、黙って聞きながら、ここはまずいよねって、皆いろいろ思っているわけですよ。もっとこうしたらいいのにと思いながら。でも、皆さん遠慮がちでできないのですよ。私はそこはあまり遠慮しないものですから。

—— この例だと、紙を貼って、グルーピングしますよね。

東大の場合は、最初はそういうことをやったのですが、最近は変わらして、パワーポイントを作らせるのですよ。皆で、いや、俺は違うとか言いながら作るのですよ。その協働作業がまたいいのですよね。

—— そうそう、そういうやり方もありますよね。そのほうが早い場合もあるし。一斉に映されるから、全員が見やすいというのがあって。

(木村) ただ、パワーポイントは、上から下の流れしか見えないのですよね。全体の流れが見えないのですよ。

やはり1回ホワイトボードに書いて、構造化してから作るほうが。まあ専門職大学院でもやっていますけれども、1回そういう立体的な共有化ができたほうがいいなとは思っているのですよね。

—— (紙の場合は) どんな意見でも付箋に必ず書いて、残るので。それが最終的に発表の段階で話されなくても、自分の意見がそこに載っているということで満足感があるのですよね。パワーポイントだと(文字データが)消えていく可能性もありますよね。

—— 年代的なものもあるかもしれないですね。

—— 発表のときにどのように発表するかという作業だったら、パワーポイントがいいかもしれませんね。

—— まあ、私たちのワークショップは、「ワークショップって何？」っていうくらいのところでもやりますので。特に今年、鹿児島島の薩摩川内でやるのですけれども、チラシに「ワークショップ」と書いたら、地域の皆さんはワークショップなんていうと、とんでもないことをやらされると思うから、言葉を変えてくれと言われてたことがあります。「話し合い」にしろと。そのくらい差があるのですよ。

—— ファシリテーターという言葉も、初めて聞く方が結構多いですね。

—— だから（地域の方に）1回説明しても、なかなか私たちが学んでいるようなファシリテーターの重要性などまでは心に落ちてやっているわけではなくて。グループの進行役です。私たちも、そのくらいでお願いしているので。

—— それで十分だと思うのですよね。

—— はい。それをすることで、こんなことをやったんだ、と。

—— 成果が出ますからね。

—— そうです。その後のことを期待しているのです。

（木村） 「グループの進行役ぐらい」で、どのくらいの成果が期待できるのですか。例えば、今回のフォーラムでも、持ちまわってファシリテーター役をやってもらいましょうという話になっていますよね。ファシリテーションをかなりやっている人なら効果が分かるのだけど、「グループの進行役ぐらい」の人はどのくらい分かるのか。

—— それはでも、当日の振り返りをしないと分からないまま終わるのではないかなと思います。例えば、今日は何々さんの進行が、うまく割り振っていたからよかったとか。意見を言わなかった人に、もう少し発言してもらったほうがよかったよねとか。そういう反省みたいなものがないと。

—— 気がつかない人が多いですね。

—— だからはっきりその場で本人の反省を言わないと、分からない。

—— ファシリテーターをやっていた方には、ここにもありますけど、ファシリテーター報告書を出していただくのですよ。

サブで入って何回も経験している私たちから見ると、この進行はまずいよなとか、もったいなかったらいいのになと思う部分は実はあるのですが、ご本人から出てくるファシリテーター報告書は、非常にうまくいった、みたいなことが書いてあったり。だから、初めてだと、できなかったことも気がつかないことは多いです。

—— アウトプットが出るではないですか。もうそれで、やったなという満足感が出るの

ではないですか。

—— そうなのです。見える化は必ずできますからね。

だから、前回もお伝えしたように、私たちサブをしたメンバーが、もう少し客観的に見て、グループのファシリテーターはどうだったか。グループ進行はどうだったか。何ができなかったのか。そのときに自分はサブとして何をしたのか。結果どうなったか。というのは、一応まとめているのですよ。

—— そうすると、ファシリテーターを評価する側もいるわけですね。

—— そうです。

—— 地域のファシリテーターに、その評価の内容を言うわけですか。

—— いや、言いません。だって、プロのファシリテーターになってもらいたいわけではないですから。

—— 私は以前、ファシリテーター役の人は、参加者の意見を聞くことによって、どういう意見があるかということがよく分かるのではないかということを使ったと思います。

その発言の意図は、ファシリテーションを学んでほしいという意味ではなくて。真ん中において両方の意見を聞くことによって、どういう意見があるということを理解すること。で、必ず仲介しなければいけないですよ。そうすると、その人の意見をまとめて、こちらの人に言わなければならない。必ず分かりやすい場を持たなければいけないので、そうするとこの人は自分でも整理がつくから、いろいろな意見があるとか、そういうことが分かるかな、という意図で言ったのです。

本当は、ファシリテーションをするということにも気がついてくだされば、もっと深いところのことが分かるでしょうけれども、その一歩手前の、自分が中立みたいなどころにいて人の話を聞く、ということをご提案したのですね。

(木村) そういう効果は、地域でも見えてきますか。

—— あります。ファシリテーターをお願いしているような人は、一般参加で参加した場合は、たぶん自分のご意見をガンガン言うような人ばかりです。そういう意味では、ファシリテーターをすることで、いろいろな人の意見を聞き、できるかできないかは別にしても調整しなければいけない役割ということは心得ているわけですから、そこでガンガン自分の意見ばかり言うようなことはできないわけです。

そういう意味では、地域にはいろいろな考えの人がいるんだとか、どうやって合意形成をしていくのだろうか、みたいなひとつの訓練にはなるわけで。たぶん一般参加者よりも、ファシリテーターをした人のほうが、1回のワークショップに参加して得たことははるかに多いと思います。

そのファシリテーターが今 250 人くらいいるので、そのネットワーク化をしていって、先生にも何回かしていただいているように、そのためのスキルアップを今後していかないと、やはり地域でいろいろな課題解決をしていく進行役はできないのですよ。

—— ただ、そのファシリテーターを務めた人が自分のレポートを出しますよね。それに対して評価をくれとは言われませんか。

—— 言われません。

—— そういうことをしたら嫌がられるのではないですか。ファシリテーションがうまくなりたくてやっているわけではないですから。次にその地域で開いて下さいということですから。

—— そう。ファシリテーターはお願いはしていますけど、ファシリテーターとしての役割をお願いしているよりも、参加者を連れてきて、というお願いのほうが大きいのですよ。

—— でも、1回やってみたら、やはり自分の技術がどうだったかというのは知りたいのではないかと思うのですよ。

—— 私たち元気ネットは知りたいですけどね。

—— 東大の場合は、どこが良かった、どこが悪かったかを教えてくださいと言われます。

(木村) 自分で気づけ、というところもあると思うのですけどね(笑)。

—— やはり気にしているのですよ。

先日、将来の日本の原子力発電はどうあるべきかという議題で、ファシリテーター1人とパネリスト3人でパネルディスカッションをさせたのですよ。そうしたら、パネリストもファシリテーターも迷うところがあるのですよ。後で、ああいうときにどうしたらいいのですかという質問が来ます。それを指摘してやると、ほっとしますよね。ああ、そうかと。

ファシリテーターが自分の意見をあまり主張してしまうと議論が続かないのですよ。だから、先ほど、控えめというお話がありましたよね。その通りですよ。

—— あるときに、日本ファシリテーター協会に登録をして、ある程度の研修を受けている方とお会いしたのですね。その彼が、自分を出さずに空気のような存在になってやるのが大事だとか、いろいろおっしゃったんですけど、それに対しては私はちょっと反論してしまいましたよね。そうではないと。

—— それだとうまくいかないですよ。意見が完全に分かれたら。

(木村) それはファシリテーターではないのですよ。それはコーディネーターなのですよ。

—— そうそう。私も言おうとしてたけど、コーディネーターなのですよ。モデレーターとかね。

(木村) そうなのですよ。それこそ **Habermas** の言っている次のステップの目標を、どうやって今のコミュニケーションで実現しようとするかということを、ファシリテーターは分かっていると厳しい。

—— 中に入りすぎてもいけないけど、傍観者みたいな態度で仕切っても、一緒に考える人だと思えませんか。だからそこがすごく難しい。

—— そういう意味では、私は地元の方がファシリテーターになるのはいい方法だと思うのですよ。東京から行って仕切るだけというのは、根付かないですよ。

—— そうですね。

—— だから、なかなか洗練されたワークショップにはならないのですけど (笑)。数を 50 回も重ねているので、スタッフの動きだけがスムーズになるのですけれども (笑)。

—— 13 ページの時間配分なのですけど、これは、グループワークを 45 分したときに、その中身の全体共有が 15 分くらい、1 グループ 3 分程度ということですよ。例えばグループワークを倍くらいの時間にしたら、共有時間は 1 グループ 5 分程度とか、そんな感じですか。

—— そうですね。

—— あと、振り返りが 5 分というのは、かなり短いような印象を受けるのですが、これは 120 分に収めたいからということですか。

—— そうです。

—— では、実際は 10 分くらいかかっているという感じですかね。

—— はい。この振り返りよりも、むしろ全体共有がとても大事なのですよ。だけど、これ以上時間をとってしまうとなかなか難しいというのもあって。

若いお母さんたちは 3 時間だと参加しないと言われてしまったのですよ。せいぜい 2 時間だったら、行ってみようかなと思う、という意見があって。

—— 小さいお子さんがいるお母さんはそうですね。なるほど。

—— このプログラムでやってみて、やはりグループワークが 45 分じゃ足りないから、50 分とか 1 時間にしようよというのは、その後地域で相談してやっていけばいいかなと思うのです。とりあえず一番ハードルを低く、短い時間にしています。

(木村) ただ本当は、短すぎると、情報が消化不良のまま終わってしまうのですよね。この長さだと、講師の質によってきますね。

—— 12 月のこの本に関するワークショップのときに、講師の情報提供が 40 分は長すぎるという意見も実はありました。でも、せっかく講師として呼び出したのに 30 分で話してくれというのはちょっと、という方もいました。

特に、放射線の話って難しいではないですか。だから、ここをまた 40 分にしたのですけど。いや、もう皆どういうことに関心があるか分かっているのだから、情報提供なんか 10 分でいいよという高校の先生もいたり。先生、授業 10 分でするんですか？ と言ったのですけど (笑)。

—— 私も、グループワークが 45 分で、情報提供が 40 分というのは、もっとわいわい皆でやったほうがいいのか、と思いました。

—— ただ、これは初歩的な学び合いだと考えると、やはり 40 分くらい勉強して、その後質問時間もある程度とって、その後話し合い、のほうがいいのか。話し合いの時間は、感想や追加の質問で終わっても仕方がないのではないかと思いますね。

(木村) 学び合いなら、これでいいのかもしれないですね。

—— これは基本ですから。1回やってもらって、それぞれが改善すればいいと思います。

—— 1グループ何人くらいなのですか。

—— 1グループは6、7人です。

だから、グループワークの時間が短いと思ったら、人数を少なくすればいいのですよ。1グループ4人とかでもいいわけです。そうすれば1人の持ち時間が多くなるわけですから。10人いて45分だったらほとんど話ができませんけど、半分の人数だったら2倍話せるわけですからね。

柏崎は、話したい人たちがくるから、30人なんていわないで、15人でやってくれと言われていています。だからその辺りは、誰が来るかによって、変えればいいと思いますし。

—— そうですね。一番ハードルを低くしておいて、あとは応用してくださいということですね。

—— 事故後に福島に行きましたか。

—— 行きました。

—— どんな感じですか。

—— いや、こういうことが全然地域できていないのですよね。本当はこういうことができるといいなと思うのですが、なかなかここまで仕掛ける人がいない。

(木村) やれば、よかったな、となるのですけどね。でも地域の中で、やりましようとする人はなかなかなくて、外から投げ込むしかなくなってしまふ。

—— そうなのですよ。本当は地域の中でこれをやるのが一番大事なのですよ。外から行ってやりましよう、ではなくて。

だから私たちも、4年間は元気ネットが東京から地域に呼びかけてやっていたのですけれども、それではなかなかだなと思うから、今度は地域事務局というものを設けて、その人が地域に積極的に声をかけるような方法にしています。そこの調整にすごい時間がかかるのです。

—— でもそのほうが、地域で開催するときの問題点がさらに明らかになって、次に開催するときの課題がまた手元に残るので、それはいいことだと思います。

—— たぶん議論が地についているのでしょうか。

—— そうだと思います。

—— 先日、大阪で開催することが急遽決まって、大阪だから名古屋大学か京大辺りから誰か先生をお願いすれば、近いからいいかなと思ったから、「こういう先生には会う機会があるから、できれば普段会えない先生にお願いしたい」ということで、木村先生にお願いしたのです。

(木村) なるほど。

—— そういう意見って、分からないではないですか。

—— そういうニーズもあるのですね。

(木村) 地域によるのですね。

—— 鹿児島するときも、遠方から来ていただいたほうが、地元にとっては、わざわざ来ていただいたという感謝があると思います、と言われたのです。やはりいろいろですよ。

—— でも、そういう1つ1つのことが積み重なって、初めて開催にこぎつけたということも、取るに足らないことかもしれませんが、非常に大切ということですよ。

—— それが、イコール満足感につながると思うのですよね。評価にはならないのですけど。

—— 評価というのは、外部評価ということですか。

—— もちろんそうです。受託者の評価。

—— 参加者の満足感で評価してもらいたいな。

—— 満足度というのも定量評価して、評価軸に入れておいたらいいかも。

—— でも、%では書けませんとかいう人もいました。

—— ということで、あまり参考になる資料ではないかもしれないけど、とりあえず私たちが今までやってきたものを簡単にまとめて、今後地域で開いていただくためのテキストとして作りました。今月末には完成しますので、またぜひ使っていただけたらと思います。

(木村) ありがとうございます。

では、次に進みたいと思います。この本を見させていただいて、「企画」の部分、ページで言うと 6 ページの部分は、今まで私たちが話し合ってきたことを整理していくと、ここにも当てはまるなと思って聞いていました。

「①何のために開くのか？」というのは、「観察者の目的設定」にあたる場所ですね。「②テーマを決定」は、私たちの場合はフォーラムの目的をどう設定するかということで、今回は「観察者の目的」＝「参加者の目的」とするというので、資料 F6-8 にまとめていましたよね。「③誰に参加してもらおうか？」は、専門家と市民に社会調査をして、応募してきた方から 10 名ずつ選ぶということが決まっています。④は今回はありません。「⑤開催日・会場」も決めましたね。F6-9 にまとめてあります。集まりやすくということを考えて、土曜日に決めたということですね。「⑥開催費用」はイニシアティブで出すということです。

ということで、企画の部分は、もう決まっているなという感じですね。

そうすると次は、やはりプログラムを決める段階なのかなということ、企画の段階から、準備の段階に入ってきたという感じがしています。

ということで、プログラムについて話し合っていきたいと思うのですが、プログラムを決めていくプロセスというのは、具体的にはいつもどうされているのですか。

—— 地域と相談して決めているのです。

(木村) 相談するときには、たたき台みたいなものを出すのですか。

—— そうです。今までの案を示して、これでどうですかというと、いや、講義を 2 つにしてほしいとか、時間が長すぎるとか、そういうので調整しています。

私たちの場合、地域が何に関心があって、どんな話が聞きたいかというところが、まずプログラムの中の講師選定になってくるのですね。

プログラムを決めるにあたっては、私たちがこのフォーラムで何を目的にしているのか、参加者がそこで何を話したいか、参加することで何を伝えたいか、ということが活かせるようにしないと、2 回目以降の参加者の意欲が湧かないですね。

私は、地域事務局を引き受けてくださった方に「そういうことなら面倒くさいからいい

わ」と言われたいためにどうするかということに気をつかっているのです。やはりそういう気もつかっていかないと。参加者が「この会に出てもな…」と思ってしまったら、もう意欲が湧かないですよ。それが何なのかというのは難しいんですけど。

(木村) とりあえず、8ページみたいなプログラム案はある程度決めたほうがいいのか、と思っているんですけど。1回目はそれなりに決まるとは思いますけど、2回目以降は難しいですね。

—— 2回目は、1回目に出た意見で、大幅に変わりますよね。もしかしたらやり方も変える必要があるかもしれません。

でも1回目は、必要なものをあてはめていって、ここで何を議論しようかということを決めていけばいいと思います。

(木村) そうですね。少なくとも1回目は決めておきましょうか。

でも、1回目は直前打ち合わせができないのですよね。

—— 前日なら空いていますけど。

—— 計画では、前日(金曜日)に打ち合わせることになっていますよね。

(木村) 開場は30分前ですよ。

それで、13時開始。まずはオリエンテーションでしょうか。

—— このフォーラムの趣旨はしっかりとここで言う必要がありますね。何を指すのか、みたいなこと。だからオリエンテーションは10分では足りないかもしれない。

(木村) 趣旨は、自己紹介の前に言ったほうがいいですか。

—— と思いますけど。趣旨を聞いて、自己紹介の内容が多少変わる人もいないのではないですか。この趣旨だったらこういうふうに言おうとか。

どちらがいいのかによりますよね。まったく先入観なしに、自分がどういう人間かということを書いてもらったほうが、このフォーラムのためにいいのかなど。

(木村) 案内状はもう送っていますからね。

—— そうですよ。趣旨は分かっているはずですよ。

—— 趣旨はこちらからお願いすることだから、大枠は変えられないでしょう。趣旨は変えられないということはまず知っていただいて。

　　だけど、細かいことというのでしょうか、フォーラムの進め方とか、こういうほうがいいのではないかという意見は取り入れますよ、みたいな雰囲気は残しておいたほうが、意欲が湧くのではないのでしょうか。決められたルールのままずっといくわけではないという雰囲気だけでもあったほうが良いと思うのですね。

　　ただ、趣旨はしっかり話さないと。何でもありと思われるのは困ると思うので。

—— それを趣旨説明に加えるということですね。

—— でも、それは簡単ですよ。2回目以降は、毎回のことを踏まえて、プログラムを決めていきます、ぐらゐの柔軟性さえ見せれば良いと思うのですけど。

(木村)　ということは、フォーラムとフォーラムの間に1回ミーティングをはさまないといけませんね。

—— そうですね。

—— でも、こちら側がそのぐらゐの積極性や柔軟性を見せることによって、向こうもそれを慮ってくれるというか。

—— それが公平性だと思いますよ。

(木村)　そう、フェアのところにそういうことが書いてありますよね。「進め方、決め方も柔軟に」ですよ。

　　あとは、20名なので、何グループに分けるのかとか、そういうことも決めないといけません。少なくとも初回をどのように乗り切るかを考えないといけません。

—— そうですよ。だから(元気ネットの)皆さん、自分がファシリテーターだと思ってください。グループ分けしたら、当然必要なのですよ。

(木村)　そうです。(元気ネットさんが)4人ということは、4グループでしょうか。

—— (私たちは)市民10名の中に、もう入っているのですか？

—— そうではなくて、グループ進行のファシリテーターに入っているのですよ。

(木村) そう、グループ進行のファシリテーター。

フォーラムの趣旨説明は、これを読むだけでも 10 分くらいはかかりますよね。

それから、手続きもやらないといけない。書類にサインするとか。

—— それはプログラムの外でいいと思いますけど。

(木村) 最初に受付でやるのでしょうか。

—— でも、伝えなければいけないことは、もう 1 回趣旨説明で伝えるということですよ  
ね。

(木村) そうしたら、趣旨説明は 10 分くらいで大丈夫ですね。

—— 謝金の手続きがございまして、15 分前にお越しく下さいと書けば、皆来ると思う  
のですけれども。事務手続きと書くと来ないけど、謝金の手続きだとモチベーションが上  
がるから。

—— (元気ネットの) ファシリテーター報告書も、それが出ないと振込みませんと言  
うと、すぐに出てくるのですよ。出さない人もいたのです。だから、皆さんの報告書が全  
て揃ったら振込み手配いたしますって言ったのです。1 人でも遅れたらなかなかできま  
せんと  
言ったら、2 日、3 日のうちに出てくるようになりました。

—— 学び合い BOOK のプログラム案には、アイスブレイクが載っていないですよ。

—— 本当は当然アイスブレイクがあるのですけれども、これは知っている組織の中で開  
くということを前提にしているのです、その時間を取っちゃったんです。知らない人が集  
まったときは必要です。

(木村) 次は自己紹介ですけど、ちなみに、自己紹介はどういう順番ですべきな  
のですか。

—— 初回は、グループ内での自己紹介というより、全員の自己紹介ですよ。

(木村) ですよ。全員 1 人 1 分でしょうか。

—— そして、それからグループ分けをするという順番ですよ。それが公平性ですよ。いきなり、あなたはAグループです、Bグループですと言われたら、公平性に欠けるから。

(木村) びっくりしますよね。

私たちも話さないといけないから、30分は見ないといけないですよ。

—— 1人30秒でいいんじゃないですか。名前、所属、自分の関心事、なぜここに来たかを一言で。

—— 関心事を言いだすと、1分になっちゃう気がしますけど。

—— 30秒と言われたときに、30秒で終わらせない人が結構参加してきそうなイメージなのですけど。

—— だからこそ、30秒で枠をつけておけば、1分くらいで終わるのではないですか。1分と言ったら3分しゃべる人もいるし。

—— チンと鳴らすのかな。

—— チンと鳴らせてもしゃべる人がいるから。

(木村) いますね。でも、あまりベルで、「チン！」と強くやると、印象悪いですから、やさしく。

—— タイマーくらいが適当でしょうか。タイマーを、タイマー係をおいてやるのではなくて、話す人の前に順番に置いてあげればいいのでは。

—— そうですね。自分のところで鳴ればいい。遠くで鳴っていると無視するかもしれないけど、自分の前で鳴れば。

—— すごい！ それも経験値ですか。

(木村) そうしたら、自己紹介は20分くらいで大丈夫でしょうか。まあ、第1回は4時間ありますからね。

—— ゆったりめで 30 分見ておいたほうがいいのではないのでしょうか。

私たちはそれこそ 10 秒くらいでいいけど、参加者には 1 分くらい話していただいたほうがいいのかも。

(木村) 5 分くらい遅れて始まる可能性も高いし、30 分くらいのほうがいいでしょうね。  
ちなみに総合ファシリテーターはどなたが？

—— 元気ネット内で 1 名用意します。

(木村) 分かりました。では、それをお願いします。

それから、元気ネットさんにやっていただく、ファシリテーター補佐というのでしょうか、影のファシリテーターが必要ですね。

—— 「グループファシリテーター」でしょうか？

(木村) では、こんな感じで。ここまでがオリエンテーションですか。

—— そうですね。それと、今日のフォーラムはどういう形で進行するというのもここで話すのですよね。後半はグループワークをします、とか。

(木村) はい。これは自己紹介の後ですね。フォーラムの進行方法は、やはり 10 分くらいかかるのでしょうか。フォーラムの趣旨説明を私がしますよね。フォーラムの進め方については、誰が説明するのだろう。

第 1 回は 13 時から 17 時、4 時間ですよね。だから 2 時間で休憩となると、15 時。15 時から 10 分くらいとか。20 分入れますか。ちなみに先ほどの休憩で 15 分くらいです。10 分だと割とあつという間なのですよね。

—— そうですよ。

—— ちょっときついですよね。

(木村) それとも、コーヒーを用意して、打ちとけてもらうという手もありますけど。いきなり打ち解けるといわれても難しいのでしょうか。

—— でも、もうグループ分けをしていますよね。

—— 隣のグループの人とも話をしてみたいということでしょう。

(木村) フォーラムの進め方は、どうでしょうか。初回は「原子カムラとはなんだろうか？」というテーマを予定をしていますけれども、いきなりその話し合いをしますか。

—— どうでしょうか。ワークショップおいてからのほうがいいような気がする。

(木村) それとも最初に、このコミュニケーション・マニュアルについて、説明しましょうか。

—— そうですね。先にその情報提供をしてからのほうがいい気がします。

(木村) では、フォーラムの進行方法の説明が終わった後、まずは、「これから 5 回の長いフォーラムをしていく中で、コミュニケーションをとっていくことが大切なことになるけれども、コミュニケーションの仕方というのがある程度あるので、少し情報提供しておきたいと思います」みたいな感じでやりましょうか。

—— いいと思います。

(木村) 私が話したほうがいいですか。

—— もちろん。

—— 最初は木村先生のほうがいいと思いますよ。何回かあったら、竹中君がやると。

(木村) 今、マニュアル自体は評価リストとして作っていますが、この中に事例を差し込んでお話すると分かるかもしれないですね。そういう感じの資料を作って、話すことにしましょうか。この説明はグループワークでしますか。

—— それは全体で聞いて、もし何か質問があったらしていただいて、その後グループワークになったほうがいいと思います。皆さんリラックスしてから分かれたほうがいいのではないですか。

—— 全体がいいですよ。

—— これをグループでやると、いろいろ意見が出すぎちゃって駄目かもしれない。全体

で聞いて、質問だけでいいと思う。

(木村) ではこれは、1時間枠をとって、13:50~14:50と。まあ、こんなに理想的に進むとはまったく思っていないですけど。

それで、20分くらい休んだほうがいいですね。ここで休憩して。コーヒブレイクをして、後半ですね。

—— そうすると、「フォーラムの進行方法」は、元気ネットのほうから誰か説明してもらったほうがいいのではないですか。木村先生が趣旨と、コミュニケーション・マニュアルの解説をするのですよね。

—— PONPOの方がするというのはどうですか。

(木村) 神崎さん。

—— そうですね。神崎さんには重要なところを担っていただいたほうがいいですよ。

(木村) そう。ここは神崎さんが出てきたほうがいいですよ。

—— そうですよ。名前が出ているのだから。どういうところが運営しているかというのが大切ですよ。

(木村) よく考えたら、最初は総合ファシリテーターに始めてもらったほうがいいですよ。

次に趣旨説明を10分。

自己紹介は30分一応とっておいて、30秒といいながらたぶん1分くらいになるだろうと。自分の前でタイマーが鳴れば、時間を守りやすいかもと。

—— それに時間も見ているから、あと何秒とあって、まとめるでしょう。

(木村) それを期待したいところですね。

それで、フォーラムの進行方法を神崎さんから10分くらい。今日のスケジュールとか、そういうことですね。

そして、最初は講義。私が、後半の話し合いをするための講義をします。

そして、コーヒブレイク。

この後は、話題としては「原子カムラとはなんだろうか?」。もう、このテーマでいいで

すよね。予定ではなくて、決定にします。

—— そこでグループ分けをするのですか。

(木村) はい。ここでやったほうがいいかなと思うので。

—— コーヒーブレイクが終わった後に、グループに座っていただくと。  
その分け方ですよね。

—— 方法もあるけど、どういうふうに分けるかもありますね。専門家と市民が半々ぐらいいいたほうがいいですかね。

—— もちろんそうですね。

—— 別々にくじ引きするとか。

—— そうですね。趣旨を話してそうすればいいと思います。

—— あれ、グループ分けは、どこでやるのですか？

—— グループ分けは、コーヒーブレイクの後です。後半のスタートのときにしたらいいと思うのです。

(木村) くじ引きでしょうか。

—— それが一番いいですよ。でも 10 人、10 人ですよ。

(木村) 10 人、10 人の 20 人だから、5 グループだったら 2 人 2 人でいけるのですよね。

—— それをどうするか。4 グループだったら、専門家が多いところと少ないところが出てきますよね。

(木村) そうなのですよ。偏りが出る。5 グループ 4 人にするか、4 グループ 5 人にするか。どちらがいいでしょうか。

—— 4 人ってどうだろう。少ない気がする。

—— 少ないような。6人ぐらいほしいような気がするのですが。3班にしちゃ駄目なのですか。

(木村) 3班にして、7、7、6、それでもいいかもしれないですね。

—— そうですね。4人だと目を外すところもなく、緊張感があるような気がします。専門家が2人で市民が2人となると、市民側がちょっと臆するかもしれないし。人数多いほうがいいですよ。

—— でも、専門家4人、市民3人になることもあるのでは？

(木村) 4人3人くらいなら、どうにか対抗できるでしょう。対抗できるって言い方も変だけど(笑)。2回目になってきたら4人でもグループワークできると思うのですがけれども、1回目は難しいかもしれないですね。初対面で、かつ専門家と市民という、立場がよく分からない人たちが集まるわけですから。

—— グループは、シャッフルするのですか。

(木村) シャッフルしたほうが良いと思うのですが。

—— そうしたら、2回目はまたメンバーが変わるということですよ。

—— そうでないと固定化しちゃいますもんね。

(木村) もしくは、第1回だけは、3回くらいシャッフルしてもいいかもしれない。

—— ああ、知り合うために。

(木村) 「原子カムラとはなんだろうか？」という話題で、自分の意見や価値観を、それこそ4つの分類に基づいて話してもらって、意見を共有する、くらいのグループワークを3回やるのもありですけど。

—— それも面白いですね。そうすると、自己紹介以外で、Aさんがどんな人か、というのがグループで分かる。面白いですよ。

—— それと、いろんな人に会える。それはいいかもしれないですね。

(木村) ただ、会えない人もいるのですけどね。でも、最初はくじ引きでいいとして、毎回くじ引きというわけにもいかないではないですか。

—— でも初回は懇親会もあるのですよね。だから、グループワークで会えなくても、懇親会で会えるかもしれない。

—— でも、懇親会って意外と隣に座っている人と話すのですよね。

(木村) どういう懇親会にするかですね。立食というのもあるけど、立食は疲れているときにやると疲れるのですよね。

—— 椅子は用意するけど、基本は立食みたいにするとか。

(木村) 私は、原子力の PR 館の人たちを集めて、その人たちの情報共有会というのを、定期的に3年間くらいやっていたのです。

最初は、集まって、自己紹介と、自分の PR 館のアピールをしてもらって。その後、情報交換で2時間半くらいかかるのですね。その後は講義です。PR 館の人たちというのは、トップの館長クラスではなくて、女性社員のほうなのですけど、そういう人たちはあまり情報を知らないのです。教えてもらえないので。講義代 (PR 館の予算) もどんどん減っていて、何も分からない状態になっているので、それをサービスする感じで、日頃疑問に思っていることを事前にアンケートで聞いて、それに関する講義を入れる。そのまま質疑応答で、そのまま懇親会に入って、講師と食べたり飲んだりしながらずっとディスカッション、というのが一番受けたのですね。

その場合は、1泊貸し会議室ごと借りて、浅草のほうだったのですが、そこでやったのです。夜も勝手に持ち込んで食べていいし。飲んでもいいし。そこに置いておいてもいいですといわれて。鍵も借りて。それでそのままそのホテルに1泊して、翌朝朝食を一緒に食べて、9時くらいから2日目のプログラムが始まるとか、そういう感じでやっていたのですね。

北は北海道から、南は玄海から、そんなに人数は多くないのですけど、そういうことをやっていたのです。

—— お座敷を貸し切っちゃえば、割と移動できるのだけれど、ちょっと狭いところで、移動もままならないところだと動けないですね。

(木村) お座敷のほうが動けますよね。

—— お座敷のほうが動くかな。隙間に入っていけるのはお座敷ですよ。ちょっとあの人と話したいなと思うと。

—— お酒を飲んでいるときの話ですか？

(木村) 懇親会はそうです。

—— 木村先生の交流会はイコールお酒。でも大切ですよ。飲めない方のことも考えないといけないけど。

(木村) それも考えないといけないですけど。

まあ、懇親会の前に、グループをどうしましょうか。

—— グループはくじ引きで、3グループですよ。

—— 3つのグループに分かれればいいのでしょうか。あ、でも同じ人になっちゃうのか。

(木村) そう、同じ人と当たる可能性が増えてくるので。だからシャッフルするとしたら、市民か専門家のどちらかが回る？ でもそうすると、専門家と市民は全員会えるけど、市民同士が会えない。

そうか、最初から3パターンになるように組んでおいて、それでくじを引いてもらえばいいのか。

—— 1枚引いたら、もう3回分の行き先が決まっていると。

(木村) 行き先が決まっている。なるべく多くの人と当たるように組み合わせを考えて。そういうの作れますよね？

—— 今その組み合わせを考えていたんですけど、意外と難しくて。でも考えておきます。1回目だけはくじで、2回目からはこう動いてくださいということですよ。

—— それか、3回目は、興味のある人のところに行ってくださいとか。この人と話をしてみたいと思うところに行ってくださいとか。

(木村) そういうのでもいいかもしれない。でもそうすると、パッと動く人たちはパッとできちゃうんだけど、そうではない人たちが残ってしまう。ずっとあの人たちと話しているんだけど、となってしまう。

だから、懇親会で、ここは 4 グループ目です、ここではくじ引きはないので、話したい人のところに行ってください、という手はあります。3 グループ目まではこちらでコントロールしておいたほうがいいかなと思います。いろいろな人とまずは話し合う機会をもったほうがいいかなと。

では、グループは 3 回交代くらいがいいですね。

グループワークは、1 回目は「なんだろう？」ということで共有させることをメインの目的にしてしまいますけど、それでいいですか。

—— はい。共有でいいと思います。

—— 3 回交代すると、グループの成果物みたいなものは出しにくくなりますよね。

(木村) そうなのですよ。

—— 共有はどういう形ですのでしょうかね。短時間で交代していくとなると、模造紙 1 枚に見える化するとかは、やりにくいですよ。

—— 班の成果物ではなくて、全体のための模造紙を用意しておいて、そこに貼っていくと。そういうことですか。それとも、3 回目でやる？

—— それか、ファシリテーターが見える化担当をきっちり決めるとか。

—— その人は動かずに。

—— そう。その人は 1 班なら 1 班にずっといて、付箋は各自書いてもらうにしても、その付箋をどんどん残しておいて。

—— 整理しておいて。

—— その見える化担当というのは、どういう人ですか。グループの中のメンバー？

—— 違う。参加者ではない人。ファシリテーターじゃなくて、ただ見える化をする人。

(木村) ファシリテーターじゃなくて？

—— すみません、提案していいですか。参加者がやるファシリテーターと、元気ネットさんのやるファシリテーターに、ちゃんと名前をつけたほうがいいと思います。「ファシリテーター」という単語の意味がどちらか分からないまま議論が展開されている気がするのです。

(木村) そうなのです。私の中では、いわゆる「グループファシリテーター」という人たちが見える化担当をするのかなと思っていたのですが。

—— そうだと思います。

—— 「グループファシリテーター」というのが、参加者ではないファシリテーター。

(木村) はい。

—— グループファシリテーターは元気ネットの方ですよ。

(木村) そうです。

—— できるかな。身内の心配をしているのですけど (笑)。

—— 補佐がほしいですよ。

—— 見える化とファシリテーションと両方やらなきゃいけないということですね。

—— だから (グループファシリテーターは、1 グループにつき) 2 人は要りますよね。6 人要りますよ。進行をやりながら、見える化もやるのは少しきつい。

—— きついですね。

—— 今「ファシリテーター」の意味を、とおっしゃったのは、ファシリテーションは参加者にやってもらうのか、ということですよ。

—— それもありますね。それから、この場で議論をするときに、単に「ファシリテーター」と言うと、それが何を指しているのか皆が分からないので。

—— 言葉の定義ができていないですよ。

—— そういふことです。

—— グループの中でファシリテーターを決めるかどうか。

(木村) それはくじ引きのときに、赤くついていた人はファシリテーターとか。

—— それは(くじの組み合わせを考えるのが)余計大変ですね。

—— そのファシリテーターは、1日延々とやるのか、交代するかにもよりますよね。

(木村) 交代したほうがいいですよ。

—— 私はそう思います。最初のねらいはそこですよ。役割としてファシリテーターをやってみるといふのが大事だということだったから、グループを移動するときには、ファシリテーターも交代するということでしょう。

—— そうすると、20人中9人しかできないですよ。次からのグループもある程度、そういうのを基にして作っていくということですか。

—— 第2回からということですか。

—— 第2回から。していない人がしてくださいということですか。

(木村) それでもいいし、少人数のグループになってくれば、できるだけやっていない人がやってくださいということで、進めるというのはあるかな。

—— 確認ですけど、グループ内でファシリテーターをする人がいて、まとめは元気ネットさんがやってくれるのですよね。それだったらできそうですね。

—— 話を進めるのは参加者。

—— 進行ファシリテーターは参加者。見える化ファシリテーターは元気ネット。

—— そうなのがいいですね。

—— そうすると、3グループとも全部テープ起こしをするわけですね。

(木村) テープ起こしは、グループワークをすればするほど大変になる。

(記録担当者) せめて誰が発言したのかが分かると、助かります。

(木村) でも、その場では名札とか用意しますよね。立てるよりも名札ですね。立てたほうが見やすいですけど。

—— 見やすいけど、移動するとなると、つけていたほうがいいですね。

(木村) そうですね。だから名札をつけてもらって、ちゃんと名前を呼びながらやっ  
てくださいと言うとか。やはり名前を呼ぶというのは大切ですので。

—— お互い呼び合ったら、覚えられますものね。

—— 私がまだ分かっていないのは、移動をするとなると、ある班がやった作業がそこに  
残っているわけではないですか。次の人がそこに来たときに、何をするのですか。

—— そうなのですよ。移動するときの見える化はものすごく難しいのですよ。

「ワールドカフェ」という移動するワークショップでは、見える化はただ意見を貼って  
いくだけなのです。後で話の流れが分からないのです。

ただ、私たちが見える化をフォローするとしたら、出た意見をいくつかの分類には分け  
られると思うのですよ。その見える化はできるかなと。似たような意見のかたまりと、そ  
れと正反対の意見と、まったく違う見方の意見と、そういう4つくらいには分けられるか  
なと。その程度に見える化はできるかなと思うのですね。

それと、そのグループの話し合いが展開していくような意見だったら、最初はこういう  
グループの意見だったのが、今度はこのように展開した、というのはできると思います。

—— このテーマだったら、そんなにたくさん違う意見が出るかしらと思うので、意外と  
かたまりで分けられるかなと。展開していくかどうかはちょっと分からないけど、展開す  
るなら展開するで、まったく別のところに置けばいいので。

—— グループが変わったときも、延々と同じ「原子カムラとはなんだろうか？」で話し

合うのか、というのもありますね。

—— そうですね。前のテーブルで 1 回言っているはずなので。次のテーブルに行ったとき、同じことを言うのか、違うことを言うのかでも違いますね。

—— それぞれ最初の 3 つのグループの成果をどこかに貼って、それを見て意見を言い出すかもしれないし、ということですよ。

—— そう。普通は、ワールドカフェ、移動するときは、前回出た意見を見て、次に来た人はその意見に対してまた何かを言うというやり方をするのです。そうしないと、ここに出ている意見と同じ意見を言っても面白くないではないですか。

—— （前のグループの意見が）残っているということですよ。

—— そうです。だから、移動してくる間に、パパッと（分類が）できるかなという心配がありますね。

—— これはリハーサル（予備フォーラム）をやりますよね。そのときに、分類をあらかじめある程度決めておいて、つまりレイアウトを決めておけばできるのではないですか。

そうすると共通の形にできあがるから、後で見比べるのもやりやすいかなと思うので。

—— 例えば、「強み」、「弱み」とか。元気ネットの「強み」、「弱み」、「その他」にしておくと、「強み」と「弱み」に同じ意見が出てきたりするのですよ。「あの人は強引だ」が強みだったり、弱みだったり（笑）。

—— そこで質問なのですが、参加者がファシリテーターをやることで気づきがあると言っていますよね。まとめるという仕事もある意味ファシリテーターの仕事ではないですか。そこを参加者がやらないで補佐の元気ネットの人たちがパパッとやってしまうのは、果たしていいことなのか。時間があるなら、最後にそこをきれいにしてから、次に行ってもらおうという作業をやったほうがいいのではないかなと思うのですが、どうでしょう。

—— そこまでできるかな。

—— 全部任せてしまうと、やり方だけが自分たちのところに残って、人の意見を聞くことができない可能性も、両方あるのですよ。だから最初は、あなたはどうか、どうですかということだけをやっていただいて。そこでは、人の意見を聞いて、なるほどと思う

かどうかわからないけど、その場を仕切るといふか、公平に話していただくというこゝを  
理解していただくという程度でいいかなと思つています。

で、見える化は元気ネットがやる。

見える化を経験してほしいのだったら、3回目のグループワークで、自分たちでもう1回  
復習してみるとか。こういう意見、こういう意見が出ていますよねという、振り返りみた  
いなことをやつて、発表してもらえばいいかもしれない。

—— それはいいですね。

—— それならできますよね。そこまで私たちがやっちゃうと、全部私たちがやっちゃつ  
たということになるから。最後に座つたところで、こういう意見が出ていて、こうなつて  
いるんだねと振り返ってもらうのはいいかもしれない。

—— それは自分の意見ではなくて、人の意見なんだけど、そういう意見を分けてみると。

—— そう。それを共有して、ここではこういう話がされたんだね、というのを発表する。

—— そうすると、直接話してはいいないけど、市民でこういう意見を言つた人がいるとい  
うことは分かるわけですね。

—— そう。復習みたいなのはすごくいいと思う。だから、3回目に整理整頓をもう一度皆  
でやつて、発表する、ならできると思う。

—— (元気ネットは) それのお手伝いをするのですよね。とまどつていたら、こうした  
らどうですか、というお手伝いはできると。

—— 発表は、参加者がやるのですね。

—— そうですね。

—— 市民と専門家と、ポストイットを分けておくとか、そのくらいの工夫は必要かもし  
れない。

—— 色を分けるとか。

—— そうすると、市民と専門家が同じことを言っている、というのが分かるかもしれな

いし。

—— それはいいですね。

—— 専門家と市民と同じような意見のかたまりがある可能性はありますよね。面白い。

—— 実際にやってみましょうよ。

—— やってみると分かりますよね。もっと洗練されていくし。

—— ここで話ただけでもどんどんアイデア出てくるから（実際にやればもっと出てくる）。

（木村） とりあえず1回目は、自分で整理をして話すということですね。話すときには、このコミュニケーション・マニュアルに則って、ある程度、感情の話なのか、論理の話なのか、分ける訓練をしてもらいますか、ここで。

—— それを入れたらいいですよ。それを皆で共有すれば、すごくいい。

（木村） 「それは本当に意見でしょうか？」とか、そういう訓練をしてもらってもいいかもしれない。

—— ファシリテーターのほうから指摘してもらって。分類してもらおうとか。

（木村） そういうことを1回目のグループワークでやって。2回目も同じことをやって。3回目はそれを見て、では、ムラがどういうものなのかを分類してみましよう、整理してみましよう。

—— それこそ、4つの分類にしたがって分けてもらえばいいのではないですか。これに沿って意見を出してもらおう。

—— マニュアルに沿っているし。

—— そう。常に分けることを意識できるから。

—— もう1つ、「その他」を作っておくとか。この4つに入らないけど、自分はこうだと

思っている人の意見を入れることができるように、「その他」も作っておいて。

—— これで分けて話し合うのは面白そうですね。なかなかきれいには分かれないうけど。

(木村) どこまでできるか分からないですけど、予備フォーラムをやってみたい感じですね。

1回目、2回目はコミュニケーションの分類の仕方がある程度把握しながら会話することに少し慣れてもらって、3回目は、そういうことも踏まえながら、出てきた意見を見て、どういうものなのかまとめてもらうということですね。

発表しますか、そうしたら。

—— 共有して、まとめてもらう。「共有」を入れないと、お1人がば一っとまとめちゃうことがあるのですよ。誰かが仕切って下さるのはいいのだけど、ちゃんと「共有して話す」ということにしないと。

(木村) 各グループが発表して、全体共有。本当にこんなにスムーズにいくのかどうか、悩ましいところではありますけど。

それで、先ほどの話であれば、次回何をするかをここで決めたいのですよ。うーん、時間が足りないなあ。

—— それは全体で、ということですよ。でも、全体共有をした時点で、かなり見えてきそうな感じがしますよね。

—— それは総合ファシリテーターが決めるのですか。

(木村) ここは総合ファシリテーターです。

—— 何を拾うかですよ、本当に。

(木村) 構造がだいたい見えてきたので、これもまた竹中君と練って、次回までにもう少しくっちりプログラムにしますよ、それを見てもらいたいと思います。それがひとつと。

あとは、「ファシリテーターのためのマニュアル」の提案も少しさせてもらって、フォーラムを実際に進められそうかな、というところまで検討したいと思っています。

さらに次々回には予備フォーラム、第1回のグループワークの部分を実際にやってみて、

プログラムのおかしいところとか、ファシリテーションするときに注意しなければいけないところを少し出して、マニュアルに入れていく。そういう流れでよろしいでしょうか。

### 3. その他

(木村) では、本日の議題は終わりましたので、最後に次回以降の予定を確認します。

第7回が1月30日(水)13:00~17:00です。東大内で会議室を探すということを予定しています。場所が決まり次第連絡をしますので、よろしくお願いいたします。

第8回が2月14日(木)13:00~17:00、場所はここがとれています。ここで予備フォーラムを実施するということになります。

第9回が2月19日(火)で、これはフォーラムの参加者を確定する会なので、どのくらい申込みが来ているかを楽しみに待つということになりますので、よろしくお願いいたします。第9回は場所はここがとれています。

ということで、予定時間を1時間ほど超過してしまいましたけれども、私からは以上ですが、何か皆さんからございますか。よろしいでしょうか。

会議は本当は時間を守るのが大切なのですが、皆様にはいつもご協力をお願いして申しわけございませんが、これからもよろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

以上